

## 和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第1～3章）

外 蘭 幸 一

### まえがき

ラリタヴィスタラ（Lalitavistara；漢訳『方広大莊嚴經』『普曜經』）は、インド大乘仏教の初期に位置する仏伝經典である。筆者は、すでに大学院生時代から始めたラリタヴィスタラの本文校訂と和訳の研究を、約46年の歳月をかけて、昨年、ようやく完了した。それらの研究は、第1章から第14章までをまとめて平成6年に刊行した『ラリタヴィスタラの研究 上巻』（大東出版社）と、第15章以下を筆者の勤務校である鹿児島国際大学（旧、鹿児島経済大学）の「紀要」（『鹿児島経大論集』『鹿児島国際大学『国際文化学部論集』）に順次発表する形で公表してきた。したがって、すでにラリタヴィスタラ全27章の拙訳は一応完成しているのであるが、それらを読み返してみると、非常に難解な仏教の術語にあふれ、専門家であっても容易に解説しがたい訳文の羅列となっている。もう少し読み易い和訳にするためには、まず何よりも専門的な仏教用語に注記を入れる必要がある。また、既発表の拙訳に付けた注記のうち、原文の異読やチベット訳との対照などに関する詳細な内容のものは、省いたほうが読みやすくなると思われる。また、いくつかの訳語については、意味は同じでも異なる表現にしたほうが分かりやすいと思われるものも含まれている。そこで、できるだけ分かりやすくすることを念頭において、ラリタヴィスタラ和訳の「改訂版」を発表することにした次第である。

梵語の原文で書かれた原著を現代語に訳す場合、現代人に分かりやすくする配慮から、特殊な専門語を無理やりそれに類似する現代語に直そうとする訳者がいる。また、原文からの直訳ではなく、いったん英語やフランス語などに訳されたものから日本語に重訳する場合、現代語としての英語やフランス語に該当する日本語に訳すことになるので、やはり現代語の翻訳ができあがる。現代人に仏教を理解させるには、現代語で訳出したものを提示すべきだというのは当然の理屈であるが、一方でそれは、互いに合わないものを無理やり結びつけるという作業になることが多い。結果として、原文の意味を歪曲して伝えるということになりかねない。言葉には、それを使用する言語体系のなかで与えられる意味があり、その言葉を異なる言語体系のなかに無理やり入れ込むと、原語と訳語との間に齟齬が発生しやすいのである。しかも、インド仏教の原典は最初に漢文（中国語）に訳されており、その漢訳の術語を基礎として理解した内容を日本語に直すのであるから、梵語原典を和訳する作業は、ある意味で、すでに一つの重訳を行なうことになる。その上に、さらに現代日本語に直すとなると、二重の重訳となり、原語と訳語との齟齬はさらに拡大するであろう。

以上の観点から、本稿の翻訳は、できるだけ漢訳の術語をそのまま残し、分かりにくい術語にはできるだけ注記を付けて、その意味をできるだけ誤解なく理解できるように配慮するという方針をとることにする。そのために、今回以降、数章ずつに分けて発表する和訳『ラリタヴィスタラ（改

---

キーワード：ラリタヴィスタラ、仏伝文学、大乘仏教、混淆梵語、仏教思想

訂版』は、注記の多い訳出になるが、そこに改訂版としての大きな意義があると自負するものである。なお、初訳に付けた注記のうち、あまりにも詳細で読解の障碍になると思われるものは省き、また、新たに判明した誤訳や不適切な訳語には訂正を加えることにする。

#### 略号

方広 = 『方廣大莊嚴經』(大正新脩大藏經 187). Chinese Translation of the Lalitavistara.

普曜 = 『普曜經』(大正新脩大藏經 186). A Chinese Translation of the (old) Lalitavistara.

『佛教大辭典』 = 『望月 佛教大辭典 (増訂版)』(昭和32年増訂版, 世界聖典刊行協会)

『梵和大辭典』 = 荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辭典』(昭和53年, 講談社)

『佛教語大辭典』 = 中村元『佛教語大辭典』(昭和56年, 東京書籍)

『上巻』 = 外薗幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』(平成6年, 大東出版社)

BHSG = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar, by F. Edgerton, New Haven, 1953.

BHSD = Ditto, Vol. II : Dictionary.

#### 括弧符号の使い分け

和訳の文章中において用いる括弧は、原則として、次のように区別する。

1. 「 」は、会話文を示すために用いる。
2. ( ) は、直前の言葉を、別の言葉で言い換えるために用いる。
3. [ ] は、訳文を補充して、意味をはっきりさせるために用いる。
4. < > は、特殊な複合語や、重要な熟語を示すために用いる。
5. < > は、主要東大写本に原文が欠落しているが、挿入すべきである部分の訳文に用いる。
6. [ ] は、主要東大写本に原文が挿入されているが、削除すべきである部分の訳文に用いる。
7. 【 】 は、諸写本に混乱があり、削除すべきか挿入すべきか確定しがたい部分の訳文に用いる。

※なお、第1章から第14章までの訳文の左端に付した数字(268~696)は、『上巻』第二部(本文校訂)における梵語原文のページ数を示すものである。

## 『ラリタヴィスタラ』（大遊戯経）

## 第1章（序品）

268 唵（オーム）<sup>1</sup>、十方<sup>2</sup>無量無辺の世界に住する、過去・未来・現在の、すべての仏陀・菩薩・聖声聞<sup>3</sup>・独覚（縁覚）<sup>4</sup>に帰命したてまつる。

かくの如く、われ聞けり。ある時、世尊（釈迦牟尼）はシュラーヴァスティ<sup>5</sup>（舎衛城）に住したまえり。ジェータヴァナ（祇樹林）<sup>6</sup>・給孤独園（祇園精舎）に、一万二千人の比丘より成る大比丘衆と共に。例えば、次の如し。長老アージュニヤータカウンディンヤ、長老アシュヴァジツ、長老ヴァーシュパ、長老マハーナーマン、長老バドリカ、長老ヤショーデーヴァ、長老ヴィマラ、長老スパーフ、長老プールナ、長老ガヴァーンパティ、長老ウルヴィルヴァーカーシュヤパ、長老ナディーカーシュヤパ、長老ガヤーカーシュヤパ、長老シャーリプトラ（舍利弗）、長老マハーマウドガルヤーヤナ（大目犍連）、長老マハーカーシュヤパ（大迦葉）、長老マハーカートヤーヤナ、長老カッピラ、長老カウシュティラ、長老チュンダ、長老プールナマイトラーヤニープトラ、長老ア Nilgga、長老ナンディカ、長老カンピラ、長老スプーティ、長老レーヴァタ、長老カディラヴァニカ、長老アモーガラージャ、長老マハーパーラニカ、長老ヴァックラ、長老ナンダ、長老ラーフラ（羅睺羅）、長老スヴァーガタ、長老アーナンダ<sup>7</sup>（阿難）、かくの如きを上首とする一万二千人の比丘衆と〔共に〕。

また、三万二千人の菩薩を伴えり。〔すなわち〕すべて一生補處<sup>8</sup>（菩薩の最高位にある者）にして、一切の菩薩の波羅蜜に熟達し、一切の菩薩の神通<sup>9</sup>もて遊戯し、一切の菩薩の陀羅尼を獲得し、《一切の菩薩の弁才を獲得し》一切の菩薩の誓願を成満し、一切の菩薩の無礙解（無礙辯）<sup>10</sup>に通暁し、一切の菩薩の三昧自在を得、一切の菩薩の自在を獲得し、一切の菩薩の忍辱に趣入し、一切の菩薩地を成就したる〔諸菩薩〕を〔伴えり〕。例えば、次の如し。マイトレーヤ菩薩魔訶薩<sup>11</sup>（弥勒菩薩）、

<sup>1</sup>「唵（om）とは「宗教的な儀式の前後に唱えられる聖語」であり、ヘブライの「アーメン」に相当する。もとは、「しかり（然り）」を意味する敬語であり、バラモン教で用いられたが、後代のヒンドゥー教では様々な神秘的解釈が与えられ、ジャイナ教や仏教にも用いられるようになった。

<sup>2</sup>「十方（dasa-dīś）とは「四方・四維・上下」を合わせたものであり、「東・西・南・北・東南・西南・西北・東北・上・下」の十方向である。

<sup>3</sup>「聖声聞（ārya-śrāvaka）とは「声聞（仏陀の教えを聞いて自己の悟りを目指す修行者）」に「聖なる」を加えたもので、声聞の中でも上座に位するものを指していると考えられる。

<sup>4</sup>「独覚（pratyekabuddha）とは「師なくして独自に悟りを得た者であるが、人々に教えを説くことのない孤高の聖者」である。「縁覚」とも訳され、「辟支仏」と音写される。

<sup>5</sup>śrāvastī（舎衛城）はコーサラ国の都城の名であり、その城の南に祇園精舎があった。

<sup>6</sup>「祇樹林（jetavana）とは「スタツ（給孤独）長者が祇陀（jeta）太子から買って釈尊に寄進した祇園精舎があった園林」である。古代インドのコーサラ国の首都であった舎衛城にあり、釈尊はここで多くの説法をしたとされる。

<sup>7</sup>以上の長老名の原語は上から順に、ājñātakauṇḍinya, āsvajit, vāṣpa, mahānāman, bhadrīka, yaśodeva, vimāla, subāhu, pūrṇa, gavānpati, uruvilvākāśyapa, nadikāśyapa, gayākāśyapa, śāriputra, mahāmaudgalyāyana, mahākāśyapa, mahākātyāyana, kapphila, kauṣṭhila, cunda, pūrṇamaitrāyaṇiputra, aniruddha, nandika, kampila, subhūti, revata, khadiravanika, amogharāja, mahāpāraṇika, vakkula, nanda, rāhula, svāgata, ānanda である。

<sup>8</sup>「一生補處（ekajāti-pratibaddha）とは「あと一つの生（生涯）を過ぎれば、その次には仏陀に成る生涯に生まれることができる」とされる菩薩の地位」である。一生補處の菩薩は兜率天に住するとされる。

<sup>9</sup>「神通（ṛddhi）とは「超人的で超自然的な、不可思議の能力」である。

<sup>10</sup>「無礙解（pratisaṃvid）とは「仏・菩薩の説法における障礙なき智弁能力」である。

<sup>11</sup>「菩薩摩訶薩（bodhsattva mahāsattva）とは「偉大なる志を持つ菩薩」であり、単なる菩薩（悟りを求める衆生）では

ダラニーシュヴァララージャ菩薩魔訶薩、シンハケート菩薩魔訶薩、シッダールタマティ菩薩魔訶薩、プラシャーントチャーリトラマティ菩薩魔訶薩、プラティサンヴィットプラープタ菩薩魔訶薩、  
270 ニテユードクタプラユクタ菩薩魔訶薩、マハーカルナーチャンドリン菩薩魔訶薩<sup>12</sup>、かくの如きを上首とする三万二千人の菩薩を〔伴えり〕。

さて、その時、世尊は、大城市シュラーヴァステイー（舎衛城）の近くに住したまえり。四衆<sup>13</sup>によって、また、王と、王子と、王の宰相と、王の大臣と、王の家臣と、刹帝利と〔在家の〕婆羅門と長者と居士と家人と眷属衆と、城民と村民と、外学師と沙門と〔出家の〕婆羅門とチャラカ派<sup>14</sup>〔の修行者〕と遊行者たちによって款待せられ、尊重せられ、恭敬せられ、供養せられて。また、世尊は、多くの美味なる食べ物や飲み物や調味料と、適当なる衣服と施物鉢と臥坐具と病医薬と資具とを得たり。また、最上なる財利と最上なる名声とを得たれども、世尊は、一切處において汚れに染まらざること、あたかも水中の蓮華の如くにして、世尊の広大なる名声・評判・称赞は、かくの如く世間に高まれり。〔すなわち〕かの世尊は、如来・阿羅漢・正等覺・明行足<sup>15</sup>・善逝<sup>16</sup>・世間解・無上調御丈夫<sup>17</sup>・天人師にして、また仏陀・世尊なり、と。彼は五眼<sup>18</sup>を具足して、この世とあの世、天界と魔界<sup>19</sup>と梵界<sup>20</sup>と、沙門や婆羅門を含む天神や人間等の生類を、自ら了知し、現証し、〔それぞれに〕通達して、住したまえり<sup>21</sup>。初め善く、中間も善く、終りも善く、意義妙にして語巧妙なる、正法を説きたまえり。純粹、円満、清浄にして、純白なる梵行<sup>22</sup>を開示したまえり。

さてその時、世尊は、夜の中更（深夜）において、ブッダーランカーラヴユーハ<sup>23</sup>（仏莊嚴）と名づける三昧に入定したまえり。世尊が、このブッダーランカーラヴユーハと名づける三昧に入定したまうや否や、まさにその瞬間に、世尊の上方に、頭頂の肉髻の中心より、プールヴァブッダーヌスメリティアサンガジュニャーナーローカー<sup>24</sup>（過去仏憶念無著智光明）と名づける光明が発出

なく、「声聞や縁覺の悟りを越えた仏陀の悟りを求める菩薩」であり、「大乘の道を進む菩薩」を意味する。

<sup>12</sup> 以上の菩薩摩訶薩名の原語は上から順に、maitreya, dharaṇīśvara, śiṃhaketu, siddhārthamati, praśāntacāritramati, pratisaṃvitprāpta, nityodyuktaprayukta, mahākaraṇācandrin である。

<sup>13</sup> 「四衆」とは「仏教教団の中の四種の信者」であり、「男性出家者（比丘）」「女性出家者（比丘尼）」「男性在俗信者（優婆塞）」「女性在俗信者（優婆夷）」の四をいう。

<sup>14</sup> 「チャラカ」(caraka) は「流浪する者」「逍遙する者」の意である。「チャラカ派」についての詳細は不明であるが、「苦行主義の修行者の一派」と思われる (cf. BHS, caraka)。

<sup>15</sup> 「明行足」(vidyāraṇasāmpanna) とは「完全なる明(知)と行とを具足せる者」の意であり、もとジャイナ教で修行完成者を意味する言葉であったものが仏教に採り入れられた。

<sup>16</sup> 「善逝」(sugata) とは「よく到達した者」「立派に完成した者」の意であり、仏陀を指す。

<sup>17</sup> 「無上調御丈夫」(anuttara-puruṣadāmyasārathi) とは「丈夫(人間)をととのえ指導する最上の御者」の意であるが、「無上士」(anuttara) と「調御丈夫」(puruṣadāmyasārathi) とに分けるのが一般的である。「如来」「阿羅漢」「正等覺」「明行足」「善逝」「世間解」「無上士」「調御丈夫」「天人師」「仏世尊」を合わせて「十号」(仏の十種の称号)と呼ぶ。最後の「仏世尊」を「仏陀」と「世尊」に分ければ、「如来」「阿羅漢」「正等覺」「明行足」「善逝」「世間解」「無上調御丈夫」「天人師」「仏陀」「世尊」を十号とすることも可能である。

<sup>18</sup> 「五眼」(pañca-cakṣu) とは「五種の眼力」であり、「肉眼」「天眼」「慧眼」「法眼」「仏眼」の五をいう。

<sup>19</sup> 「魔界」(sa-māra) とは「魔王の支配する世界」の意味であるが、ここでは「欲界の上四天」を指すものか。【佛教語大辞典】1281頁参照。

<sup>20</sup> 「梵界」とは「梵天(brahman)の世界」の意であり、ヒンドゥー教では最高神の世界であるが、仏教では色界の初禪天に配置されている。

<sup>21</sup> チベット訳によれば、「住したまえり」ではなく、「説き示したまえり」である。

<sup>22</sup> 「梵行」(brahmacarya) とは「清らかな修行」の意であり、「淫欲を断ってさとりを求める実践的修行」をいう。

<sup>23</sup> 原語は buddhālaṃkāravūha (仏陀を麗飾する莊嚴) である。

<sup>24</sup> 原語は pūrvabuddhānusrīyasaṅgajñānaloka (過去仏を憶念する無礙なる智慧の光明) である。

せり。それは、すべての浄居天宮<sup>25</sup>を照らし、マヘーシュヴァラ<sup>26</sup>（大自在）天子を初めとする、無量（無数）の天子衆を鼓舞せり。また、その如来の光明の網より、かくの如き勸請の偈が出現せり。

- 272 1. 智慧光を有し、闇を滅する、放光者、  
光明<sup>じょうびやく</sup>浄白にして、清浄無垢なる最上の威光あり、  
身体静穩にして、意は清浄寂滅なる、  
釈迦族<sup>しやくかぞく</sup>の獅子<sup>しし</sup>たる牟尼<sup>むに</sup>（尊者<sup>しんこん</sup>）に親近すべし。
2. 智の大海にして、清浄なる大威徳を有し、  
法の自在主にして、一切知なる牟尼の王、  
天中天<sup>てんちゅうてん</sup><sup>27</sup>にして、人天<sup>にんてん</sup>（人間や天神たち）に供養せらるべき、  
法における自存者・支配者たる者に帰依すべし。
3. 制御しがたき心を自在に支配したる、  
意においてマール（魔）<sup>ま</sup>の繫縛<sup>けいばく</sup>を脱したる、  
この世において見聞するのみにても無益ならざる、  
かの、寂靜なる解脱の彼岸に達したる者のもとに來詣せよ。
4. 無比なる法を顕明ならしめたる、  
闇を破りて正理に通暁せる、  
所作<sup>しよさ</sup>寂靜<sup>じやくじよう</sup>にして覚知<sup>かくち</sup>無量<sup>むりよう</sup>なる、かの仏陀のもとに、  
〔汝らは〕皆、信愛<sup>しんあい</sup>（バクティ）<sup>28</sup>をもって來詣せよ。
5. 彼は医王にして、甘露<sup>かんろ</sup><sup>29</sup>の医薬を与える者、  
彼は弁才の勇者にして、外道<sup>げどう</sup>を摧伏する者、  
彼は法の親族にして、最勝義<sup>さいしょうぎ</sup>を了知せる者、  
彼は導師にして、無上の道を説き示す者なり、と。

かくして、実に、かの浄居天子衆<sup>じょうくてんししゅう</sup>は、そのブッダーヌスマリティアサンガジュニャーナーローカー（〔過去<sup>30</sup>〕<sup>30</sup>）<sup>30</sup> 仏憶念無著智光明）なる光明によって打たれ、また、かくの如き類の、それらの偈によって勸請せられるや否や、〔彼らは、かねて〕<sup>31</sup> 全き寂靜の境にあれども、〔今や〕三昧より起ちて、仏の威力により、無量・無数・過数量<sup>31</sup>の劫よりも〔なお〕過ぎたる〔ほど長期の過去世にわたっ

<sup>25</sup> 「浄居天」（suddha-āvāsa）とは「色界第四禪の五境地である無煩天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天」を指し、これらは聖者のみが住するところであるから「浄居天」と総称される。

<sup>26</sup> maheśvara（大自在天）は「世界の主宰神」であり、特にシヴァ神をさしている。仏教では「色界の諸天の最頂なる色究竟天に住する」とされる。『佛教語大辞典』917頁参照。

<sup>27</sup> 「天中天」とは「最高の天神」の意。

<sup>28</sup> 「バクティ」(bhakti)とは「熱烈なる愛着をもって神を信仰すること」であり、「誠信」とか「信愛」と訳される。ヒンドゥー教の聖典たる「バガヴァッド・ギーター」で宣揚されたものが、仏教でも用いられるようになった。外園幸一「ラリタヴィスタラにおける「信」について」（戸崎宏正博士古希記念論文集「インドの文化と論理」九州大学出版会、2000）所収参照。

<sup>29</sup> 「甘露」（amṛta）とは「不死」の意味を持ち、これを飲むと不老不死になるとされる天上の靈薬であるが、仏教では「仏陀の教え」の喩えとして用いられる。

<sup>30</sup> 上では pūrvabuddha-（過去仏）とされていたが、ここでは pūrva（過去）がない語形となっている。

<sup>31</sup> 「過数量」（gaṇanā-samatikrānta）とは「計数しえざるほど多くの」の意である。

274 存在せる]、かの[多くの]諸仏世尊を憶念せり。すなわち、それら諸仏世尊の、<sup>ぶつこくど</sup>32の功德の莊嚴や大衆会なるものはどうであり、また、説法なるものはどうであったか、それらのすべてを憶念(想起)したり。

さて、実にその夜、<sup>しんしん</sup>深々[と寝静まり]たる頃、イーシュヴァラ(自在主)と名づける浄居天子、また、マハーシュヴァラ、ナンダ、スナンダ、チャンダナ、マヒタ、プラシャーanta、及び、プラシャーantaヴィニーターシュヴァラ<sup>33</sup>と名づける者のほか、多くの、彼ら浄居天子衆は、神聖なることこの上もない色相をもって、<sup>ぎじりん</sup>ジュータヴァナ(祇樹林)全体を、天上の光明をもって照らし、世尊の在すところに近づき来たりて、世尊の足下に頭面をつけて礼拝したるのち、一方に坐せり。一方に坐したる、彼ら浄居天子衆は世尊に、かくの如く述べたり。「世尊よ、ラリタヴィスタラと名づける法の章句(法門)にして、大方広<sup>34</sup>なる集成たる經典あり。菩薩の善根<sup>35</sup>を称揚し、<sup>とまつ</sup>兜率天の端嚴なる宮殿からの降下(下生)について熟慮し、入胎の[遊戯]神変、在胎中の奇特を説き、[生まれたる]家柄の高貴なること・出生地の勢力[の大なる]を説き、あらゆる[普通の]幼童の行為に比して功德のはるかに卓越せること、世俗的な諸々の<sup>ぎげい</sup>技芸・<sup>しんべん</sup>工芸・<sup>いんげい</sup>書写・<sup>いんげい</sup>数理・<sup>いんげい</sup>印契・<sup>いんげい</sup>計算・<sup>いんげい</sup>刀剣・<sup>いんげい</sup>弓矢・<sup>いんげい</sup>勇武(戦闘)・<sup>いんげい</sup>相撲において一切衆生に優越せるを説き、中宮における感官の享樂を説き、あらゆる菩薩行の自然の結果(等流)に由来する果報の獲得を述べ、菩薩の遊戯(神変)と、一切魔軍の降伏と、如来の[十]力<sup>36</sup>と[四]無所畏<sup>37</sup>と十八不共[法]<sup>38</sup>とを集めたる、無量なる仏法を説けるものにして、過去の諸仏によっても、かつて演説せられたり。[過去の諸仏とは]すなわち、次の如し。世尊パドゥモッタラ、ダルマケーツ、ディーパンカラ(燃燈)<sup>39</sup>、グナケーツ、グナーカラ、マハーカラ、リシデーヴァ、シュリーテージャス、サトヤケーツ、ヴァジュラサンハタ、サルヴァービブー、ヘーマヴァルナ、アティウッチャガーマン、プラヴァーダサーガラ、プシュパケーツ、ヴァラルーパ、スローチャナ、リシグプタ、ジナチャクラ、ウンナタ、プシュピタ、ウールナーテージャス、プシュカラ、スラシュミ、マンガラ、スダルシャナ、マハーシンハテージャス、ステイタブッディダッタ、ヴァサンタガンディ、サトヤダルマヴィプラキールティ、ティシユヤ、プシュヤ、ローカスンドラ、ヴィスティールナ《ブラ》バ、ラトナキールティ、ウグラテージャス、《ラトナテージャス》、ブラフマテージャス、スゴーシャ、スプシュバ、《スメールプシュバ》、スマノージュニヤゴージャ、スチューシュタルーパ、プラハシタネートラ、グナラーシ、メーガスヴァラ、スンドラヴァルナ、アーユステージャス、サリーラガジャガーマン、ローカービラーシタ、ジ

<sup>32</sup>「仏国土」(buddha-kṣetra)とは「仏陀の住む清浄な国土」であり、「浄土」とも呼ばれる。単に「仏国」ともいう。

<sup>33</sup> 以上の天子名の原語は、īśvara, maheśvara, nanda, sunanda, candana, mahita, praśānta, praśāntavinīteśvara である。

<sup>34</sup>「方広」(vaipulya)とは「広大なるもの」「増広発展せしめられたもの」の意であり、「方広經典」は「大乘經典」を意味する。ここではさらに強調して「大方広」と呼ばれている。

<sup>35</sup>「善根」(kuśala-mūla)とは「善をもたらす根本」「よい果報をもたらす善行」「功德の業因」を意味する。

<sup>36</sup>「十力」(daśa-bala)とは「仏陀(如来)の持つ十種の特別な力」であり、「処非処智力」「業異熟智力」「静慮解脱等持等至智力」「根上下智力」「種種勝解智力」「種種界智力」「遍趣行智力」「宿住随念智力」「死生智力」「漏尽智力」の十をいう。

<sup>37</sup>「四無所畏」(catur-vaiśāradya)とは「説法において畏れを知らない四種の自信」であり、「正等覚無畏」「漏永尽無畏」「説障法無畏」「説出道無畏」の四をいう。単に「四無畏」とも訳す。

<sup>38</sup>「十八不共法」とは「仏陀にのみ具する十八の特質」であり、元来は「十力」「四無畏」「三念住」「大悲」を合計したものであるが、大乘仏教では「身口意の三業について過失のないこと」「衆生に対する平等心」「禪定による心の安定」「一切を攝取して捨てない心」「衆生済度の欲求・精進・念力・禪定・智慧の五点について減退せざること」などを含む十八の特性をいう。

<sup>39</sup>「燃燈仏」(dīpaṅkara)は、過去世において釈迦菩薩に未来成仏の予言(記)を授けた仏陀である。「錠光如来」とも呼ばれる。

ナシャトル、サンブージタ、ヴィパシュイン（毘婆尸）、シケン（尸棄）、ヴィシュヴァブー（毘舍浮）、クラクッチャンダ（拘留孫）、カナカムニ（拘那含牟尼）、及びカーシュヤパ（迦葉）如来・阿羅漢・正等覚者<sup>40</sup>によって、かつて説かれたり。それを、世尊もまた、今、説きたまわんことを。多くの衆生の利益のために、多くの衆生の安樂のために、世間を哀愍せんがために、大衆人民の利益のために、天（天界）と人（人間界）との安樂のために、また、この大乘の宣揚のために、一切の外異学の摧伏のために、一切の菩薩の称揚のために、一切のマーラ（悪魔）の降伏のために、一切の菩薩乗の人（ブドガラ）<sup>41</sup>をして精進の發起に向かわしめんがために、正法の愛護のために、三宝<sup>42</sup>の種を愛護せんがために、三宝の種を断絶せしめざらんがために、仏陀の所行を顕示せんがために」と。世尊は、天界を含む世間〔の衆生〕を哀愍するが故に、黙然として、かの諸天子〔の要請〕に同意したまえり。

その時、実に、諸天子は、世尊が黙然として受諾したまえるを知るや、歓喜し、踊躍し、喜悅し、満足し、欣快を生じて、世尊の足下に頭面をつけて礼拝し、世尊を右邊三匝<sup>43</sup>し、天上の旃檀香末・沈水香末・曼荼羅花を〔世尊に〕注ぎかけたのち、まさにそこに没したり。

さてまた、世尊は、その夜の明けんとする時、カリーラ道場<sup>44</sup>に往詣したまいて、菩薩衆にかしずかれ<sup>45</sup>、声聞の衆にかしずかれて、世尊は設けられたる座に坐したまえり。坐して、また、世尊は諸比丘に告げたまえり。

「さて、比丘らよ、深々〔と寝静まり〕たる夜半に、イーシュヴァラと名づける浄居天子、また、マヘーシュヴァラ、ナンダ、スナンダ、チャンダナ、マヒタ、プラシャーンタ、《プラシャーンタ》ヴィニーテーシュヴァラ<sup>46</sup>と名づける者のほか、多くの、彼ら浄居天子衆は〔云々と述べて<sup>47</sup>〕、前述の如く、乃至、まさにそこに没したり〕〔と告げたまえり〕。その時、実に、かの諸菩薩と、かの大声聞衆とは、世尊に向かって合掌礼拝し、世尊に対して、かくの如く述べたり。

「それ善きかな、世尊よ。そのラリタヴィスタラと名づける法門を説きたまえ。それは群生<sup>48</sup>の利益となり、群生の安樂となり、世間に対する哀愍となり、大衆人民と、天神と人間と、今日及び将来の諸菩薩摩訶薩とに、富と利益と安樂とをもたらずべし。〕〔と〕。世尊は、彼ら諸菩薩摩訶薩と、彼ら大声聞衆と〔の要請〕に、黙然として同意したまえり。天神と人間と阿修羅とを含む世間を哀

<sup>40</sup> 以上の過去仏名の原語は上から順に、 padmottara, dharamaketu, dipaṃkara, guṇaketu, guṇākara, mahākara, ṛṣideva, śrītejas, satyaketu, vajrasaṃhata, sarvābhībhū, hemavarṇa, atyuccagāmin, pravāḍasāgara, puṣpaketu, vararūpa, sulocana, ṛṣigupta, jinacakra, unnata, puṣpita, ūrṇātejas, puṣkala, suraśmin, maṅgala, sudarśana, mahāsiṃhatejas, sthītabuddhidatta, vasantaḡandhin, satyadharmavīpulakīrti, tiṣya, puṣya, lokasundara, vistīrṇa<pra>bha, ratnakīrti, ugratejas, <ratnatejas>, brahmatejas, sughoṣa, supuṣpa, <sumerupuṣpa>, sumanojñaghoṣa, suceṣṭarūpa, prahasitanetra, guṇarāśin, meghasvara, sundaravarṇa, āyustejas, salilagajagāmin, lokābhilāṣita, jītaśatru, saṃpūjita, vipaśyin, śikhin, viśvabhū, krakucchanda, kanakamuni, kāśyapaである。この中で「毘婆尸」以下の諸仏が過去六仏であり、これに「釈迦牟尼」を加えて「過去七仏」と称する。過去七仏のうち、前の三仏は「過去莊嚴劫の三仏」とされ、後の四仏は「現在賢劫の四仏」とされる。

<sup>41</sup> 「ブドガラ」(pudgala)とは「人、個体、個人存在、生存主体」の意であり、「補特伽羅(ふとがら)」と音写される。

<sup>42</sup> 「三宝」(tri-ratna)とは「三種の宝」であり、「仏(悟りを得た人)」「法(仏の教え)」「僧(法を受けて修行する人々の集団)」をいう。「仏・法・僧」は仏教を構成する三つの基本的要素である。

<sup>43</sup> 「右邊三匝」とは古代インドの礼法であり、「右肩を貴人にむけて、時計の針と同じ方向に右回りに三周すること」である。

<sup>44</sup> 「カリーラ道場」については詳細不明であるが、カリーラ(karīra)とは「茎状の植物(竹、サトウキビ、葦など)」であり、「梵和大辭典」には「筍」と訳され、「竹枝」の訳例が挙げられている。

<sup>45</sup> チベット訳では「かしずかれ」ではなく、「圍繞せられ」である。

<sup>46</sup> 上記では「プラシャーンタヴィニーテーシュヴァラ」とあったが、ここでは「プラシャーンタ」の原文が欠けている。

<sup>47</sup> 上述と同じ内容を繰り返すことを避けて、省略する手法が用いられている。

<sup>48</sup> 「群生」とは「多くの衆生」の意である。

愍するが故に。

そこで、かくの如く言われる。<sup>49</sup>

6. さて、比丘らよ、今日、この夜に、  
われ、煩惱を離れて、至福のうちに坐し、  
清浄なる境地<sup>50</sup>に入りて、  
心を統一し集中してありし時、
7. 大神力<sup>だいじんりき</sup>あり、色身<sup>しきしん</sup>明らかにして、  
無垢なる威光に輝ける、諸天子が来たり、  
[その]威光により、この祇樹<sup>ぎじゅ</sup>と名づける森を照らし、  
欣然<sup>きんぜん</sup>として、わが近くに<sup>らいし</sup>来至せり。
8. マヘーシュヴァラ、チャンダナ、イーシャ（イーシュヴァラ）とナンダ、  
プラシャーンタチッタ、マヒタ、スナンダナ、  
及び、シャーンタと名づける天子、  
また、かれこれ多くの、拘胝<sup>こてい</sup>（千万）もの天神が、
9. 足下<sup>ちようらい</sup>に頂礼し、われを右邊<sup>うしよう</sup>なせるのち、  
この、わが面前に坐せり。  
[十]指（両手の指）をもって合掌し、  
ここに、彼らは恭しくわれに勧請せり。
10. 「牟尼<sup>むに</sup>よ<sup>52</sup>、実に、貪欲滅除<sup>どんよくめつじゆ</sup>の根本なる、  
方広<sup>ほうこう</sup>經典<sup>きやうてん</sup>たる、かの大因縁<sup>だいいんねん</sup><sup>53</sup> [を説ける經典] あり。  
これ即ち、一切世間を利益<sup>りやく</sup>せんがために、  
かつて、あらゆる如来によって説かれたるものなり。
- 280 11. さればいざ、今また [その經典を] 牟尼は説きたまえ。  
菩薩衆<sup>ぼさつしゆ</sup>を撰護<sup>せんご</sup><sup>54</sup>せんと欲したまわば、  
また、この最勝なる大乘を演説し、  
外異学<sup>がいいがく</sup><sup>55</sup>とナムチ（魔）<sup>56</sup>とを降伏せんがために」[と]。

<sup>49</sup> 「そこで、かくの如く言われる」(tatrēdam ucyate) というのは、散文で前述した内容を重ねて韻文（偈頌）で要約する際に用いる「重頌」形式の定型的表現である。

<sup>50</sup> vihāra は通常「精舎」と訳されるが、ここでは「心の状態」を意味するとみて「境地」と訳した。【上巻】（既出版の拙著）では「所住」と訳したが、「境地」のほうが適訳と考えられる。BHSD(vihāra) 参照。

<sup>51</sup> 「色身」とは「肉体の形」を意味する。

<sup>52</sup> 「牟尼」(muni) とは「賢者」「聖者」の意である。ここでは釈迦牟尼（釈尊）を指す。

<sup>53</sup> 「大因縁」(mahā-nidāna) の「因縁」(nidāna) とは、元来は「十二部経」（經典を形式と内容から十二種に分類したもの）の一つであり、「仏陀が律の条項または経を説くに至った縁由を述べる部分」（『佛教大辭典』4051頁参照）に名づけたものである。ここでは、菩薩が悟りを得て仏陀と成った過程を「成仏の因縁物語」とし、それを強調して「大因縁」と呼んでいる。

<sup>54</sup> 「撰護」(parigraha) とは「撰取して愛護すること」である。

<sup>55</sup> 「外異学」(para-pravāda) とは「外道の教え」であり、仏教とは異なる教えを説く宗派全般を意味する。

<sup>56</sup> 「ナムチ」(namuci) は「マール（悪魔）」の別名である。



12. [われは] 黙然として、天神衆の勸請を受け、  
 また、諸天神に同意したれば、  
 [天神衆は] みな歡喜し、踊躍し、満足し、  
 喜悦を得て、花を散じたり。
13. それ故、比丘らよ、今こそ [汝らは] みな、われより聴くがよい。  
 実に、一切世間を利益せんがために、  
 かつて、あらゆる如来によって説かれたる、  
 方広經典なる、大因縁 [を説ける經典] を、と。

[以上]「序品」と名づける第1章なり

## 第2章（[下生] 勸告品）

- 282 さて、比丘らよ、そのラリタヴィスタラと名づける、大方広經典なる法門<sup>57</sup>とは如何なるものか。  
 ここに、比丘らよ、菩薩ありて、兜率天の端嚴なる宮殿に住し、供養せらるべき者ら（神々）に供  
 養せられ<sup>58</sup>、灌頂を受けるに至りて、百千の天衆に稱讚・讚歎・稱揚・贊美せられ、[自己の] 所願  
 を達し [たるのち]、[衆生済度の] 誓願によって生じ、一切の仏法を成満せる覚知を有し、極めて  
 广大清淨なる智眼を有し、[正] 念・慧・理知・慚恥・満足<sup>59</sup>の赫奕たる廣大なる覚知を有し、布施・  
 持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・大方便善巧<sup>59</sup>の至上の波羅蜜に到達し、偉大なる〈慈・悲・喜・  
 捨の梵道〉（四梵住）に精通し、偉大なる神通と明知とによって無礙無障なる知見を現前せしめ、  
 [四] 念住<sup>60</sup>・[四] 正斷<sup>61</sup>・[四] 神足<sup>62</sup>・[五] 根<sup>63</sup>・[五] 力<sup>64</sup>・[七] 覺支<sup>65</sup>・[八] 正道<sup>66</sup>の、一切の

<sup>57</sup> 方広には「方廣神通遊戯大嚴經典」と訳されている。

<sup>58</sup> 原文 pūjyapūjita は「供養せらるべくして供養せられ」の意味とみることできる。方広には「爲無量威徳諸天之所供養」と訳されている。

<sup>59</sup> 「方便善巧」(upāyakaṣāla) とは「人々を悟りに導く教化方法（方便）に巧みであること」を意味する術語である。ここでは「大」をつけて「方便善巧」を強調している。

<sup>60</sup> 「四念住」(catvāri smṛtyupasthānāni) とは「四種の觀想法」であり、「身念住・受念住・心念住・法念住」の四である。旧訳では「四念處」と訳す。

<sup>61</sup> 「四正斷」(catvāri samyakprahāṇāni) とは「四種の道徳的努力」であり、「已生の惡を断ずること」「未生の惡を生ぜざらしめること」「未生の善を生ぜしめること」「已生の善を増長せしめること」の四である。「四正勤」とも訳す。

<sup>62</sup> 「四神足」(catur-ṛddhipadāḥ) とは「超自然的な神通力を得るための四種の實踐修行法」であり、「欲神足」「勤神足」「心神足」「觀神足」の四である。「四如意足」とも訳す。

<sup>63</sup> 「五根」(pañca-indriyāṇi) とは「解脱に至るための五種の機根」であり、「信根」「精進根」「念根」「定根」「慧根」の五である。「五勝根」ともいう。

<sup>64</sup> 「五力」(pañca-balāni) とは「涅槃に至らしめる五種の力」であり、「信力（信仰）」「精進力（努力）」「念力（憶念）」「定力（禪定）」「慧力（智慧）」の五である。

<sup>65</sup> 「七覺支」(sapta-bodhyaṅgāni) とは「悟りを得るために役立つ七種の修行項目」であり、「択法覺支」「精進覺支」「喜覺支」「輕安覺支」「捨覺支」「定覺支」「念覺支」の七である。

<sup>66</sup> 「八正道」(āryāṣṭāṅgika-mārgaḥ) とは「理想の境地に達するための八種の實踐徳目」であり、「正見」「正思惟」「正語」「正業」「正命」「正精進」「正念」「正定」の八である。「八聖道」とも訳す。

菩提分法<sup>67</sup>は円満成就<sup>くきょう</sup>の究竟<sup>しんちやく</sup>に達し、無量なる福德の集積たる諸相隨好<sup>しよそうずいこう</sup>によって身体を美しく飾られ、永き間〔正道に〕隨順<sup>ずいじゆん</sup>し、言行一致して虚妄ならざる語業をもって語り、真直にして邪曲なく正直にして障礙なき心を有し、一切の慢心・倨傲・放逸・怖畏・憂惱を捨離し、一切衆生に対して平等心あり、無量百千拘胝那由多<sup>こーたいーなよつた</sup><sup>68</sup>もの菩薩より繰返し容顏を瞻仰せられ、帝釈・梵天・大自在天・〔四〕護世王・天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅迦<sup>69</sup>・羅刹の衆によって名声を称揚せられ、一切の句をよく分別し演説に障礙なき〔四〕無礙解<sup>むがいげ</sup><sup>70</sup>に入る智に通達し、一切の仏陀の所説を保持する〈記憶の容器〉の散乱することなき無量無辺なる陀羅尼<sup>たらに</sup><sup>71</sup>を獲得し、〔四〕念住・〔四〕正断・〔四〕神足・〔五〕根・〔五〕力・〔七〕覺支・〔八〕正道・般若波羅蜜・方便善巧の法宝と福德より作られたる〈法の大船〉の大商主にして、四暴流<sup>しぼうりゅう</sup><sup>72</sup>の彼岸に渡らんとの意願を有し、マーラ（魔）と敵とを撲滅し、一切の外学者（外道の論者）をよく調伏し、戦陣の先頭に雄々しく立ち、煩惱なる敵衆を撲滅し、最勝の金剛なる智慧を堅固なる武器となし、菩提心を根となす大悲の茎は増上意樂<sup>ぞうじょういぎらく</sup><sup>73</sup>より生じ、甚深なる精進の法水による湿润あり、方便善巧を花苞となし、〔七〕覺支と禪定とを花卉となし、三昧を雄蕊となし、無垢なる<sup>むくどくじよ</sup><sup>74</sup>功德聚の池より生じ、慢心と放逸との熱惱なき〔清凉なる〕月光に無垢なる葉を大きく開き、戒と聞<sup>もん</sup><sup>75</sup>と不放逸との芳香は十方に障礙なく満ちわたり、世間における智の長老（上座）にして、八世法<sup>はつせはふ</sup><sup>76</sup>に染汚することなき〈最勝丈夫なる蓮華〉にして、福德と智との資糧より発する馥郁たる香りあり、般若と正智<sup>せいち</sup><sup>77</sup>との日光により、極清浄なる紅蓮華の〔如き〕眼を開き、〔また〕四神足のこの上なき大速力あり、四聖諦<sup>ししやうたい</sup><sup>78</sup>をもって鋭利なる爪と牙となし、四梵住の齒が生えそろい、四摂事<sup>ししやうじ</sup><sup>79</sup>をもってしっかりと立てる頭あり、十二支縁起の覺知をもって次第に現出せる身体〔肢分〕となし、三十七菩提分法の成

284

<sup>67</sup> 「菩提分法」(bodhipakṣadharmā)とは「菩提(悟り)を成就するための実践修行の方法」であり、「四念住」「四正断」「四神足」「五根」「五力」「七覺支」「八正道」を合計して三十七種となるので「三十七菩提分法」と称する。「三十七道品」あるいは「三十七覺分」などとも呼ばれる。

<sup>68</sup> 「拘胝」(koṭī)も「那由多」(nāyuta)も大きな数の単位である。一般に前者は「千万」とされ、後者は「千億」とされるが、異説もある。

<sup>69</sup> 「天」から「摩睺羅迦」までを、一般に「天龍八部」と称する。「仏法を守護する、八種の神話的存在」である。

<sup>70</sup> 「四無礙解」(catuṣ-pratisamvid)とは「仏・菩薩の説法における障礙なき四種の智弁」であり、「法無礙」「義無礙」「辭無礙」「樂説無礙」の四である。「四無礙辯」「四無礙智」ともいう。

<sup>71</sup> 「陀羅尼」(dhāraṇī)とは「法を心にとどめて忘れないようにするための、神秘的な呪文効果を持つ章句」であり、「総持」とも訳される。

<sup>72</sup> 「四暴流」(catur-ogha)とは「四種の激しい煩惱の流れ」であり、「欲暴流」「有暴流」「見暴流」「無明暴流」の四である。

<sup>73</sup> 「増上意樂」(adhyāsaya)とは「高潔なる願望」「高邁なる志向」の意。

<sup>74</sup> チベット訳によれば、「無垢なる」(vimala)ではなく、「広大なる」(vipula)である。

<sup>75</sup> 「聞」(śruta)とは「聞いて学ぶこと(学問)」「聞いて学んだこと(知識)」の意。

<sup>76</sup> 「八世法」(aṣṭau loka-dharmaḥ)とは「利(lābha)」「衰(alābha)」「称(yaśas)」「譏(ayaśas)」「譽(praśamsā)」「毀(nindā)」「樂(sukha)」「苦(duḥkha)」の八である。「世八法」ともいう。

<sup>77</sup> 「般若」(prajñā)は「存在のすべてを全体的に把握する悟りの智慧」であり、単に「智慧」とも訳される。「正智」(jñāna)とは「個々の事象を正しく把握する智見」であり、単に「智」とも訳される。「智慧」が「一切万物の真実を把握する全体的智見」であるのに対して、「智」は「存在を分析的に把握する個別的知識」を意味する。

<sup>78</sup> 「四聖諦」(catur-āryasatyā)とは「仏教の立場から見た四種の基本的真理」であり、「苦諦」「集諦」「滅諦」「道諦」の四である。単に「四諦」ともいう。

<sup>79</sup> 「四摂事」(catvāri saṃgrahavastūni)とは「衆生を仏道に誘引するための四種の包容の態度」であり、「布施」「愛語」「利行」「同事」の四をいう。

満をもって美しき鬚毛の房となし、明<sup>80</sup>と智とのたてがみを有し、三解脱門<sup>81</sup>をもって欠伸<sup>82</sup>となし、止と観<sup>83</sup>との明浄なる眼を有し、禪定・解脱・三昧・等至<sup>84</sup>をもって山間の洞穴に住するとなし、四威儀<sup>85</sup>と律とを森や林に繁茂せる樹木となし、十力と〔四〕無所畏<sup>86</sup>による迫力（接近する力）あり、有（生存）と非有（消滅）と〔の双方〕に対する恐怖も身毛豎（ぞつとすること）もなく、畏縮することなき勇武あり、諸外学（諸々の外道の教え）を兎や鹿の大群として摧伏し、無我なる言音を大獅子吼として響かしめる（人獅子）にして、〔また〕解脱と禪定との光輪より発する智慧の光線によって諸外学の発する螢火の群を光輝なきものたらしめ、無明の暗黒の盲膜を払って翳りなきものとなし、力と精進との灼熱あり、天（天界）と人（人間世界）とを福德の威光もて照らす（大丈夫なる太陽）にして、〔また〕黒分の半月を過ぎて満ちたる（白分の半月<sup>86</sup>）にして、心を魅了する美しき外観あり、眼根（視覚器官）を損害することなく、百千の天神衆の星座によって〔周囲を〕嚴飾せられ、禪定と解脱と智との光輪を有し、〔七〕覚支の安樂をもって涼しき光線となし、賢明なる天神や人間をクムダ（白睡蓮）<sup>87</sup>として開花（開悟）せしめる（大丈夫なる月）に等しく、四衆を〔四〕洲<sup>88</sup>として〔順次に〕巡り、七覚支の宝物を所有し、一切の衆生に平等心を起こし、覚知において障礙なく、十善業道<sup>89</sup>の禁戒<sup>90</sup>と苦行とから〔さらに〕甚だ豊盛円満なる勝位に進まんとの意願（願望）を有し、法の王なる（最上法宝の車輪）を障礙なく転ぜしめ、転輪聖王<sup>91</sup>の種族の家系に属する（偉大なる法の転輪聖王にして<sup>92</sup>）、甚深にして測り難き縁起を一切の法宝もて満たし、聴聞するに厭足<sup>93</sup>なくして廣大無辺なる智と戒との造修の時節を違越することなく、【大蓮華蔵の眼あり<sup>94</sup>】大海や大地の如く廣大なる覚知を有し、地・水・火・風〔の四大元素〕に平等心を生じ、メール山の如き堅固なる力と不動なる意とを有し、貪愛と瞋恚とを捨離し、虚空の如く無垢廣大にして広博無比なる覚知を有し、増上意樂は甚だ清浄にして、よく布施をほどこし、前世にすぐれたる因縁を造り、よく供養をなし、約束を守り（妄語することなく）、一切の善根を勤求し、

<sup>80</sup> 「明」(vidyā)とは「神聖なる知識」の意味であり、「明知」とも訳される。通常、「リグ・ヴェーダ」「サーマ・ヴェーダ」「ヤジュル・ヴェーダ」の三ヴェーダを「三明」と称する。

<sup>81</sup> 「三解脱門」(tri-vimokṣamukha)とは「悟りに通じる三つの門戸」であり、「空解脱門」「無相解脱門」「無願解脱門」の三をいう。「空」「無相」「無願」という三種の禪定（三昧）の名称でもあるので、「三三昧」とも呼ばれる。

<sup>82</sup> 「欠伸」とは、猛獣が見せる「あくびと背のびの姿勢」のことである。

<sup>83</sup> 「止」(samātha)とは「心の動揺がおさまり静止した境地」であり、「寂止」とも訳される。「観」(vidarśanā; vipaśyanā)とは「万物を正しく観察する清浄な境地」であり、「勝観」あるいは「妙観」とも訳される。両者は常に一体として作用すべきものであり、その場合「止観」という術語が用いられる。

<sup>84</sup> 「等至」(samāpatti)とは「心身平等にして平安なる境地」を意味する。

<sup>85</sup> 「四威儀」とは「行・住・坐・臥における正しい立ち居ふるまい」のこと。

<sup>86</sup> 「黒分」とは「太陰暦における、月の欠けていく下半月」であり、「黒月」「黒月分」ともいう。「白分」(白月)とは「月欠けてから満ちるまでの期間」であり、「太陰暦における、各月の1日から15日に至る間」をいう。

<sup>87</sup> 「クムダ」(kumuda)は「白色にして月の昇る時に咲く睡蓮」である（『梵和大辞典』参照）。

<sup>88</sup> 「四洲」(catuḥ-dvīpa)とは「須彌山の四方の海に位置するとされる大陸」であり、「東勝身洲（プールヴァヴィデーハ）」「南瞻部洲（ジャンブドヴィーパ）」「西牛貨洲（アパラゴダーニーヤ）」「北俱盧洲（ウッタラクル）」の四大洲である。

<sup>89</sup> 「十善業道」(daśa-kuśala-karma-patha)とは「十種の善なる行為」であり、「不殺生」「不偷盜」「不邪淫」「不妄語」「不両舌」「不惡口」「不綺語」「不貪欲」「不瞋恚」「不邪見」を「十善」という。これらから「不」を除けば「十悪」となる。

<sup>90</sup> 「禁戒」(vrata)とは「禁止事項として自らに誓約した戒め」である。

<sup>91</sup> 「転輪聖王」(cakravartī-rāja)とは「天から与えられた宝輪を転じて四方を征服するとされる神話的な帝王」であり、「武力を用いず、正義のみによって全世界を支配する聖王」とされる。

<sup>92</sup> 〈 〉内の部分はチベット訳にはあるが、梵語原文に欠落している。

<sup>93</sup> 「厭足」とは「飽きて嫌がること」である。

<sup>94</sup> 【 〃 】内の原文は写本 T3になく、またチベット訳にも、これに相当する訳文はない。

熏修<sup>95</sup>による〔善き〕習気<sup>96</sup>（習慣性）あり、一切の善根を成就し、七阿僧祇劫<sup>97</sup>において一切の善根を修集し<sup>98</sup>、七種の布施<sup>99</sup>をほどこし、五種の福業事<sup>100</sup>に専念し、身体による三種・言語による四種・心意による三種の善行<sup>101</sup>を実修し、十善業道を勤修し、四十の支分を具足する〈正しき加行<sup>102</sup>〉に親近し、四十の支分を具足する〈正しき誓願〉を發願し、四十の支分を具足する〈正しき増上意樂〉を起し、四十の支分を具足する〈正しき解脱〉を成満し、四十の支分を具足する〈正しき信解<sup>103</sup>〉を真直ならしめ、〔過去世において〕四百万拘胝尼由多<sup>104</sup>にも及ぶ諸仏に随って出家し、五百五十万拘胝尼由多にも及ぶ諸仏に施物をほどこし、三百五十拘胝（三十五億）にも及ぶ独覺（辟支仏）に供養をなし、無量無数の衆生を生天<sup>105</sup>と解脱との道に導き、無上正等覺<sup>106</sup>を正覺せんと欲し、一生補處〔の菩薩〕と成り、この〔人間の〕世から没して（生天して）兜率天の端嚴なる宮殿に住し、シュヴェータケート<sup>107</sup>と名づける最上なる天子として、一切の天神衆から「彼は、ここより下生して人間の世界に生じ、久しからずして無上正等覺を正覺すべし」とて供養せられながら、その大宮殿に安穩に坐したまえる時<sup>108</sup>、〔すなわち〕三万二千階建てにして、露台・小塔・塔門・窓架・涼房・重閣・高楼によって嚴飾せられ、傘蓋・旗幟・幢幡が掲げられ、宝石の鈴網の帳蓋<sup>109</sup>が掛けられ、曼荼羅<sup>110</sup>・大曼荼羅の花が散り敷かれ、十方拘胝尼由多にも及ぶアプサラス（天女）<sup>111</sup>衆の伎樂が奏でられ、アティムクティカ・チャンパカ・パータラ・コーヴィダーラ・ムチリンダ・マハムチリンダ・アショーカ・ニヤグロード・ティンドウカ・アサナ・カルニカー

288

<sup>95</sup>「熏修」とは「香りが周囲のものに影響していつのまにか染み込むように、習慣的行為の影響が心に感化を及ぼすこと」をいう。

<sup>96</sup>「習気」(vāsanā)とは「行為が残す潜在的余力」であり、「繰り返された行為が深層意識に残す気分の習慣性」を意味する。

<sup>97</sup>「阿僧祇」(asamkhyeya)とは「計算できないほど多くの」「無数の」の意である。「阿僧企耶」とも音写され、「十の五十九乗を意味する」とされる（『佛教語大辞典』5-6頁参照）

<sup>98</sup>「修集」とは「修行して身に集めること」である。

<sup>99</sup>「七種の布施」(sapta-vidha-dāna)の意味は定かではないが、いわゆる「無財の七施」とは「眼施（やさしい眼差し）」「和眼悦色施（にこやかな表情）」「言辞施（おだやかな言葉）」「身施（きびきびした行動）」「心施（まごころある奉仕）」「床座施（席をゆずること）」「房捨施（自分の家に宿泊させること）」の七種である。

<sup>100</sup>「福業事」(puṇya-kriyāvastu)とは「幸福をもたらす善い事から」の意であり、通常は「三種の福業事（布施・持戒・修習）」が説かれるが、さらに「財」と「徳」を加えて「五種の福業事」とする（Mvyut 1700-1704参照）。

<sup>101</sup>「身体による三の善行」とは「不殺生」「不偷盗」「不邪淫」,「言語による四の善行」とは「不妄語」「不両舌」「不悪口」「不綺語」,「心意による三の善行」とは「不貪欲」「不瞋恚」「不邪見」であり、合わせて「十善」となる。

<sup>102</sup>「加行」(prayoga)とは「目的を達成するための手段として行なう準備的な修行」であり、「正行に対する予備行」を意味する。「四十の支分」の内容は明らかでないが、菩薩の段階を四つの十位に分けて「四十位」「四十心」等とすることを受けているものと思われる。「四十位」とは「十住」「十行」「十回向」「十地」の計四十であり、「四十心」とは「十信」「十住」「十行」「十回向」の計四十である。

<sup>103</sup>「信解」(adhimukti)とは「教えを信じ、理解して進んで向上しようとする意欲」である（『佛教語大辞典』776頁参照）。「勝解」ともいう。

<sup>104</sup>「尼由多」(niyuta)は大きな数の単位であり、梵和大辞典には「百万」とされているが、「那由多」と音写される場合もあり、しばしば nayuta（千億）と混同される。

<sup>105</sup>「生天」(svarga)とは「天上世界（に再生すること）」である。

<sup>106</sup>「無上正等覺」(anuttarā-samyaksambhī)とは「最上の正しい完全な悟り」を意味する大乘仏教の用語である。「阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみゃくさんぼだい）」と音写される。

<sup>107</sup>原語 śvetaketu は「白く輝く旗」の意である。方広には「淨幢」と訳されている。

<sup>108</sup>チベット訳には「安穩に坐したまえる時」に該当する部分がない。

<sup>109</sup>「帳蓋」(vitāna)とは「仏像や祭壇などの上にかざす傘状の天蓋」である。もとは「強い日光をさえぎるために貴人の上にさしかける日傘」であったが、のちに仏像などの莊嚴具となったものである。

<sup>110</sup>「曼陀羅花」(māṇḍārava)とは「色よく、芳香を放ち、高潔で、見る者を喜ばせるとされる天界の花」（『佛教語大辞典』1285頁参照）である。宇宙の真理を図像として表現した、いわゆる「曼荼羅」(maṇḍala)とは異なる。

<sup>111</sup>「アプサラス」(apsaras)は「天界に住む美女」であり、通常「天女」と訳される。

ラ・ケーシャラ・サーラ<sup>112</sup> [等] の大宝樹に飾られ、黄金の網に覆われ、大いなる満溢せる水瓶に  
 厳浄せられ<sup>113</sup>、床は平らかにして莊嚴に瑩飾せられ、ジュヨーティル・マーリカー・スマナス・  
 ヴァールシキー・タラニ・ヴァリ・ゴータラニ・スガンディカ・ダーヌスカーリン・デーヴァスマ  
 ナス・ウトバラ・パドマ・クムダ・プンダリーカ・サウガンディカ<sup>114</sup> [等] の花の大帳蓋が処々に  
 掛けられ、パトラグプタ・シュカ・サーリカー・コーキラ・ハンサ・マユラ・チャクラヴァーカ・  
 クナーラ・カラヴィンカ・ジーヴァンジーヴァカ<sup>115</sup>等の諸種の鳥群の美妙なるさえずりが響き、百  
 千拘胝尼由多もの天衆が対面し視線を向けて [互いに] 瞻仰し、崇嚴にして広大なる〈法の合唱〉  
 によって、感覚的享樂に傾倒する煩惱のすべてを断ち、悪意・忿怒・憎悪を捨離し、慢心・倨傲・  
 驕 佚を断除し、広大にして赫奕たる歡喜・信樂<sup>116</sup>・愉悦・正念を生じたる、そこ（大宮殿）に安  
 穩に坐しながら、[菩薩が] 法の大講説をなしたまえる時、かの八万四千の樂器と合唱との音響の  
 中より、菩薩の前世の淨業の集積の故に、かくの如き、鼓舞勸發の偈が出現せり。

1. 広大なる福德を集積し、  
 正念・智力・證知は無辺にして、智慧の光明を發する者よ、  
 剛力無双にして、勇猛絶大なる者よ、  
 ディーパサハ<sup>117</sup>なる者（ディーバンカラ仏）の授記<sup>118</sup>を想起せよ。
2. 広大かつ無垢なる意思ある者よ、  
 三垢<sup>119</sup>の穢を捨離し、放縱・過惡を滅除せる者よ、  
 純粹・無垢・清淨なる心を有する者よ、  
 往昔、[汝による] かくの如き布施行ありし、と想起せよ。
- 290 3. [前世において生まれたる] 高貴なる種姓を、  
 また、寂止・持戒・禁戒・忍辱・自制と、  
 精進・[五]力・禪定・智慧とを、  
 幾拘胝那由多もの劫において修習したるを想起せよ。
4. 想起せよ、名声無辺なる者よ、  
 汝によって供養せられたる、幾【拘胝<sup>120</sup>】那由多もの諸仏を想起せよ。  
 [汝は] 衆生を哀愍して、  
 今、この好機を黙過することなかれ。

<sup>112</sup>「アティムクティカ」から「サーラ」まで樹木の名称であり、原語は順に atimuktaka, campaka, pāṭala, kovidāra, mucilinda, mahāmucilinda, aśoka, nyagrodha, tinduka, asana, karṇikāra, keśara, sāla である。

<sup>113</sup>チベット訳には「大いなる満溢せる水瓶に厳浄せられ」に該当する部分がない。

<sup>114</sup>「ジュヨーティル」から「サウガンディカ」まで花の名称であり、原語は順に jyotir, mālīkā, sumanas, vārṣikī, taraṇi, vali, gotaraṇi, sugandhika, dhānuṅkārin, devasumanas, utpala, padma, kumuda, puṇḍarīka, saugandhika である。

<sup>115</sup>「パトラグプタ」から「ジーヴァンジーヴァカ」まで鳥の名称であり、原語は順に patragupta, śuka, sārīkā, kokila, haṃsa, mayūra, cakravāka, kuṅāla, kalaviṅka, jīvaṃjīvaka である。

<sup>116</sup>「信樂」(prasāda) とは「疑念なく信じ喜ぶこと」である。

<sup>117</sup>dīpasaha は「灯明をもたらす者」の意であり、dīpaṃkara (燃燈仏) の異称である。cf. BHSD.Dīpasaha.

<sup>118</sup>「授記」(vyākaraṇa) とは「仏陀が特定の者に対して未来成仏を予言すること」である。大乘仏教において、仏陀の予言（授記）は仏陀の全知全能性の故に必ず実現すると信じられるようになった。

<sup>119</sup>「三垢」とは「食欲」「瞋恚」「愚癡」（貪瞋癡）であり、「三毒」ともいう。人間を迷わす三つの根本的煩惱である。

<sup>120</sup>チベット訳によれば、ここに koṭi (拘胝) があるべきだが、韻律に抵触する。

5. 下生<sup>げしやう</sup>せよ、下生の法を知る者よ、  
老・死・煩惱を終滅せしめる、無塵<sup>むじん</sup>なる者よ、下生せよ。  
多くの天神・阿修羅・竜・夜叉、  
乾闥婆<sup>けんたつば</sup>（ガンダルヴァ）衆が待ち設けたり。
6. [たとえ] 千劫にわたって[愛欲を] 享樂するも、  
海が水に飽かざるが如く、飽くことなし。  
いざ、智慧もて満足せる者となり<sup>121</sup>、  
久しく渴きに苦しめる衆生を満足せしめたまえ。
7. 瑕疵<sup>かし</sup>なき名声ある者よ、  
汝は、法悦<sup>ほうえつ</sup>を享樂するも、愛欲を享樂すること断じてなし。  
然れども、無垢<sup>しか</sup>なる眼<sup>まなこ</sup>を有する者よ、  
世間を、天神衆ともども、哀愍<sup>あいきん</sup>したまえ。
8. 那由多<sup>なよた</sup><sup>122</sup>もの天神衆は、  
汝の法を聴いて、未だ厭足<sup>みんそく</sup>することなし。  
然れども、無暇處<sup>むかじよ</sup><sup>123</sup>に趣きたる者たち、  
悪趣<sup>あくしよ</sup>に住する者たちを觀察したまえ。
- 292 9. しかもまた、無垢<sup>まなこ</sup>なる眼<sup>まなこ</sup>を有する者よ、  
[汝は] 十方の世界に諸仏を見て、  
また、そこから法を聴く。  
その最勝なる法を世間に分与されたし。
10. また、光輝ある者よ、  
汝の福德の光輝によって、兜率天宮<sup>とそつてんぐう</sup>は照らされたり。  
然れども、悲愍<sup>ひみん</sup>の心ある者よ、  
ジャンプ樹の島（閻浮提<sup>えんぶだい</sup>)<sup>124</sup>に雨を降らしめよ。
11. 欲界<sup>よくがい</sup><sup>125</sup>を超過せる、  
色界に住する衆多の諸天神ありて、  
みな、かく欣求<sup>きんぐ</sup>せり、  
[[菩薩は] 禁戒を成就して、菩提を得べし][と]。

<sup>121</sup>チベット訳は「汝の心の満足こそ最も善きものなり」という意味の訳文となっている。

<sup>122</sup>チベット訳は「那由多」ではなく、「拘胝」の訳語 (bye ba) を用いている。

<sup>123</sup>「無暇處」(akṣaṇa) とは「不遇、不運、災難」の意であり、「仏法を聴くことができない不運な境界」をいう。無暇處は八種であり、「八難處」とも呼ばれる。すなわち「地獄」「餓鬼」「畜生」「長寿天(長寿を楽しみ求道心が起こらない天界)」「辺地(楽しみが多すぎる理想郷)」「盲聾瘖啞(感覚が欠損した状態)」「邪見(よこしまで正理に従わない心)」「仏前仏後(仏陀が存在しない世界)」の八種である。このうち、「地獄」「餓鬼」「畜生」は苦しみの多い三つの世界(三悪趣: 三悪道)である。

<sup>124</sup>「閻浮提」(jambu-dvīpa) とは「ジャンプ樹のある洲」の意味であり、須彌山の南側にある大陸を指すので、「南瞻部洲」とも呼ばれる。もとはインド亜大陸を意味したが、後には「人間世界の全体(娑婆世界)」を意味するようになった。

<sup>125</sup>仏教の世界観で、生き物が住む世界全体を三層に分け、下から「欲界」「色界」「無色界」と名づける。「欲界」は「欲の盛んな世界」であり、地上の六道(地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上)と六欲天(四大王天、三十三天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天)から成る。「色界」は欲界の上であり、欲を離れた清らかな天界から成る。「無色界」は物質を超えた精神のみの世界であり、最高の禪定を修めた者が生まれる處である。

12. 庇護者よ、汝によってマーラ（悪魔）の所業は摧破せられ、  
 他の外道邪見は、汝によって摧伏せられたり。  
 菩提は汝の手掌にあ[るも同然な]り。  
 今、まさに好機なれば、《それを》逸するべからず。
13. 煩悩の火によって焼かれたる世間に、  
 勇者よ、汝は雲の如くに遍満し、  
 甘露の雨を降らしめよ。  
 諸々の人間と天神との煩悩を鎮めたまえ。
14. 汝は身体の要素に通達せる医師なり。  
 医師なくして久しく病める衆生を、  
 三解脱[門]の治療薬によって、  
 速やかに、涅槃の樂に安住せしめたまえ。
- 293 15. 獅子の吼声を聞かざれば、  
 狐狼どもは恐れずして、叫声を挙げたり。  
 仏陀の獅子吼をとどろかして、  
 狐狼なる外道衆を驚怖せしめたまえ。
16. 菩提道場（開悟の座）<sup>126</sup>において、  
 剛力と精進力とを具足し、智慧の燈明を持ち、  
 最勝なる手掌もて大地を打って<sup>127</sup>、  
 マーラ（悪魔）を<sup>128</sup>降伏したまえ。
17. 汝に鉢を献納すべき定め、  
 四護世王は、待ち設けたり<sup>129</sup>。  
 また、誕生せる汝を抱き取るべき、  
 那由多もの[多くの]帝釈や梵天も[待ち設けたり]。
18. 善意あり、血統高貴なる者よ、  
 [汝が]そこに住して菩薩行を示現すべきところの、  
 種族の宝（最高の種族）に生じたる、  
 誉れ高き族姓<sup>130</sup>を觀察されたし。
19. まさに、それ（種族の宝）を容器となして、  
 [その中に]珠寶<sup>131</sup>[なる菩薩]を置けば、光輝あるものとなるべし。

<sup>126</sup> 大乘經典においては、釈迦牟尼が菩提（悟り）を證得する場所である樹下の座を「菩提道場」（bodhi-maṇḍa ; dharaṇi-maṇḍa）と称することが多い。

<sup>127</sup> 仏伝文獻では、降魔の場面で、釈迦菩薩は大地を打って、自分が前世に行なった善行の証人として大地の女神を呼び出す、というモチーフが用いられる。

<sup>128</sup> 「マーラ（悪魔）を」の部分は、チベット訳では「この者どもを」という意味の訳文となっている。

<sup>129</sup> 成道後第七の七日において、釈迦牟尼はトラブシャとバツリカと名づける二人の兄弟商人から食事の供養を受けるが、その時に四護世王（四大天王）は釈迦牟尼が商人たちから食物を受け取るための鉢を献上するというストーリーになっている。本経第24章参照。

<sup>130</sup> 「族姓」（kula）とは「家系、家柄」の意である。

<sup>131</sup> 「珠寶」（maṇi-ratna）とは「宝玉の宝」「最高の宝石」を意味する。「摩尼珠」「宝珠」などと同意である。

珠寶の如き無垢なる覚知ある者よ、  
ジャンプ樹の鳥（閻浮提）に雨降らしめたまえ。

20. かくの如き、あれこれの類の、  
伎楽の音より発する偈頌は、  
悲愍心ある者（菩薩）を勧発せり。  
「今、まさに好機なり、逸するなかれ」と。

〔以上〕「〔下生〕勧告品」と名づける第2章なり。

### 第3章（清浄種族品）

- 296 かくして、比丘らよ、菩薩<sup>132</sup>は、かくの如き、法（遵守すべき義務）<sup>133</sup>の時節〔を知らせる偈〕によって鼓舞勧発せられたる時、かの大宮殿より去りて、ダルモーチャヤ<sup>134</sup>（法集）と名づける、〔かねて〕菩薩が坐して兜率天の天神衆に法を説きたるところの大堂閣、そこに菩薩は昇れり。昇りて、また、スダルマ（妙法）〔と名づける〕獅子座<sup>135</sup>に坐せり。その時、菩薩と同類にして同乗<sup>136</sup>に赴きたるところの天子、彼らもまた、同じくその堂閣に昇れり。また、十方より来集せるところの、菩薩と同行なる菩薩衆及び天子衆、彼らもまた、その堂閣に昇りて、それぞれ〔の功績〕に応じたる各自の獅子座に坐し、〔彼らは〕アプサラス（天女）衆を除き凡俗なる天子衆も除きて、増上意樂の同等なる〔者のみ〕を従者となして、〔しかも〕六十八【千】拘胝<sup>137</sup>〔もの多き〕に及ぶ従者を有したり。

かくして、比丘らよ、菩薩の母胎への降入を十二年後にひかえたる、その時に、淨居天の天子衆は、ジャンブドヴィーパ（閻浮提）に來たりて、天神の色相を隠し、婆羅門の姿をなして、〔他の〕婆羅門たちにヴェーダ<sup>138</sup>を教示したり。「かくの如くにして、母胎に入るところの者、その者は〈三十二の大人の相〉<sup>139</sup>を具足すべし。それらを具足する者には、二種の道のみありて、第三〔の道〕

<sup>132</sup> 主人公としての菩薩釈尊が単に「菩薩」と呼ばれており、あたかも個人名のように用いられているので、「釈迦菩薩としての菩薩」と「他の諸菩薩」とを区別して、誤解のないようにしなければならない。

<sup>133</sup> 「法」（dharma）の意味は多義的であり、「秩序」「法則」「規則」「正義」「教法」「徳」などの意味があるが、ここでは、菩薩が衆生済度のために負うべき義務的行為を意味するものと考えられる。

<sup>134</sup> dharmoccaya は講堂の名である。方広には「法集堂」と訳されている。

<sup>135</sup> 「獅子座」（simhāsana）とは「王座」「玉座」の別称であり、通常は「仏陀の座席」を指す。獅子が百獣の王であるように、仏陀も一切衆生の王者であるから、その座を「獅子座」と呼ぶ。漢訳仏典では「師子座」とすることが多い。ここでは、その獅子座の名称を特に「スダルマ」（sudharma）と称している。

<sup>136</sup> 「同乗」（sama-yāna）とは、「同じ道を行く者」「同じ教えに従う者」「同じ乗り物に乗り合わせる者」を意味するが、ここで「菩薩と同乗に赴きたる者」というのは、三乗（声聞乗、縁覚乗、菩薩乗）のうち、「菩薩乗（大乘）を志す者」を暗示している。

<sup>137</sup> 写本によって千（sahasra）を欠くものと、拘胝（koṭi）を欠くものに分かれる。方広には「六十八拘胝」と訳されている。

<sup>138</sup> 「ヴェーダ」（Veda）は婆羅門教の聖典であり、古くはリグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダを「三明」（三ヴェーダ）と称して聖典としたが、後にはアタルヴァ・ヴェーダを加えて「四ヴェーダ」を聖典とするようになった。

<sup>139</sup> 「三十二大人相」は単に「三十二相」ともいう。「偉人の具える三十二のすぐれた身体的特徴」であり、仏陀または転輪聖王の身体に具わっていると考えられた。その一つ一つの内容については經典ごとにかかなりの相違が見られる。「三十二相



はなし。彼がもし〔在家者として〕家に住するならば、<sup>てんりんじょうおう</sup> 転輪聖王となりて、四辺際（全大地）を征服し、法に随う（有徳なる）<sup>しちほう</sup> 法王にして、七宝を具足する者となる。彼には、かくの如き七宝が生ずる。すなわち、<sup>りんぼう</sup> 輪宝、<sup>ぞうぼう</sup> 象宝、<sup>めほう</sup> 馬宝、<sup>にょほう</sup> 女宝、<sup>じゅほう</sup> 珠寶、<sup>ちやうじやほう</sup> 長者宝、及び<sup>しやうぐんほう</sup> 將軍宝（<sup>しんぼう</sup> 臣宝）が第七なり。

298 転輪聖王は、如何なる種類の輪宝を具足するや。ここに、<sup>かんじょう</sup> 灌頂せられたるクシャトリヤ（<sup>せつてい</sup> 刹帝利）<sup>り</sup>140の王ありて、まさにかの<sup>ふまつにち</sup> 布薩日<sup>141</sup>なる〔月の〕第十五日に、頭を洗淨し、<sup>さいかい</sup> 齋戒<sup>142</sup>を守り、高楼上に至りて、<sup>さいにょ</sup> 姝女衆<sup>143</sup>に<sup>いりやう</sup> 圍繞せられたる時、東方に、天の輪宝が出現し、〔それは〕千輻あり、車網あり、<sup>こしき</sup> 轂あり、金色に輝き、工人の作にあらず、【すべての方面から】<sup>しやうら</sup> 七ターラ<sup>144</sup>の高さあり。また、その天の輪宝を見て、クシャトリヤの<sup>かんじょうおう</sup> 灌頂王は、かくの如く思念す。『確かに、われは聞けり。すなわち、灌頂せられたるクシャトリヤの王が、まさにかの布薩日なる、〔月の〕第十五日において、頭を洗淨し、齋戒を守り、高楼上に至りて、姝女衆に圍繞せられたる時、東方に、天の輪宝が出現するならば、その者は転輪聖王となる、と。定めて（必ずや）われは転輪聖王ならん。われ、今、天の輪宝を試みるならば、いかに』<sup>145</sup>〔と〕。かくして、クシャトリヤの<sup>へんだんう</sup> 灌頂王は<sup>けん</sup> 偏袒右肩<sup>146</sup>して、右の<sup>しつりん</sup> 膝輪を地につけ<sup>147</sup>、かの天の輪宝に向かって右手を差し伸べ、かくの如く呼びかけたり、『主よ、天の輪宝を、法に従って<sup>かいてん</sup> 廻転せしめたまえ、<sup>ひほう</sup> 非法に依ることなからんことを』〔と〕。その時、かの天の輪宝は、クシャトリヤの灌頂王によって<sup>じんずう</sup> 転ぜられ、神通により空中を<sup>じんずう</sup> 通って、正しく、東方に向かって進む。転輪聖王は、四部より成る<sup>148</sup> 軍隊とともに、後に随う。また、その天の輪宝が止まるところの地点、そこに、クシャトリヤの灌頂王は、四部の軍隊とともに、住居を定む。その時、東方の小国王たるところの者たち、彼らは、金粉に満ちたる銀鉢を捧げ、あるいは、銀粉に満ちたる金鉢を捧げて、<sup>ほうげい</sup> 転輪聖王を<sup>ほうげい</sup> 奉迎し、また、かくの如く言う、『来たれ、王よ。ようこそ、王よ。王の、この領土は繁栄し、富み、平和であり、食物豊饒にして、楽しく、多くの人民に満ちたり。王よ、自らの領土に<sup>ほうげい</sup> 来たりて、住したまえ』〔と〕。かくの如く言われるや、クシャトリヤの灌頂王は、彼ら小国王たちに、次の如く語る。『汝らは、自らの王国を法に依りて<sup>ほうげい</sup> 治めよ。非法に依ることなかれ。されば、汝らは、生類を殺すことなかれ。与えられざるものを<sup>ほうげい</sup> 盗ることな

と並んで八十種好（副次的特徴）を説くこともあり、また、両者を合わせて相好ともいう。『佛教語大辞典』472頁参照。

<sup>140</sup> kṣatriya は「王族、武人の階級」であり、インドにおける四姓（四つの身分カースト）の第二位に位置づけられる。「刹帝利」は kṣatriya の音写である。

<sup>141</sup> 「布薩」（poṣadha）とは、「半月ごとに同一地域の僧が集まって自己反省し、罪を告白懺悔する集まりで、月の十五日・三十日（すなわち満月と新月の日）に行なう」。『佛教語大辞典』1175頁参照

<sup>142</sup> upavāsa には「断食」の意味もあるが、ここでは「齋戒」と訳した。齋戒とは「心身を清浄にするために、心身の行為・動作をつつしむこと」であり、通常は「八齋戒（八戒齋）」（在家信者が出家生活を一日だけ守るものとされる）と呼ばれ、「生き物を殺さない」「盗みをしない」「性交しない」「嘘を言わない」「酒を飲まない」「化粧せず歌舞を視聴しない」「ゆったりした高いベッドに寝ない」「正午以後の食事をしない」の八つを守ることである。

<sup>143</sup> 「姝女」とは「宮廷の侍女」のことである。

<sup>144</sup> tala（多羅）は樹木（棕櫚に似た樹）の名称であるが、高いものは24~25mにも及び、高さの単位としても用いられる。葉は大きく広がり、これを用いて写経したものを貝多羅・貝葉と呼ぶ。

<sup>145</sup> 「定めて」以下の部分は、チベット訳では「わが前に天の輪宝が来たれるが故に、われもまた転輪聖王なること必定なり、とて」という意味の訳文となっている。

<sup>146</sup> 「偏袒右肩」とは、恭敬の意を表すインド古来の作法の一種であり、上衣の右片袖を脱いで右肩をあらわし、左肩のみを覆うことである。

<sup>147</sup> 「右膝著地」もインドの礼法であり、「右の膝と足先とを地につけ、左の膝を立て、足裏を地につけて敬礼すること」である。『佛教語大辞典』79頁参照。

<sup>148</sup> 「四部兵」とは「象兵、戦車兵、騎兵、歩兵」であり、「象軍、車軍、馬軍、歩軍」の四種の軍隊を意味する。

かれ。愛欲に妄りに耽ることなかれ。偽りを語るることなかれ、乃至<sup>149</sup>、わが領土において非法を生ずることなかれ。非法の行為を愛好することなかれ」[と]。

300 実に、かくの如くにして、クシャトリヤの灌頂王は東方を征服す。東方を征服して、東方の海に進む。東方の海に至りて、東方の海を越える。東方の海を越えて、神通により空中を通過して、正しく、南方に向かって進む。転輪聖王は、四部より成る軍隊とともに、後に随う。前述と同様にして、南方を征服す。南方と同様にして、西方と北方とを征服す。北方を征服して、北方の海に至る。[北方の海に<sup>150</sup>] 至りて、北方の海より戻る。戻りて<sup>151</sup>、神通により空中を通過して、正しく、王城に還来し、中宮の門の上に、無事に停止する。クシャトリヤの灌頂王は、かくの如き種類の輪宝を具足する。

転輪聖王は、如何なる種類の象宝を具足するや。ここに、灌頂せられたるクシャトリヤの王に、前述[輪宝出現と同様]の如くにして、象宝が生ずる。純白にして、七肢<sup>152</sup>は美しく整い、黄金の冠飾を着け、黄金の旗を掲げ、黄金の蔽具に飾られ、黄金の網に覆われ、神通を有し、空中を通過して進み、変現[自在]の法を有する、すなわちボーディ(菩提)と名づける象王なり。また、クシャトリヤの灌頂王が、その象宝を試みんと欲する時、その時は、日の出の時刻に象宝に乗り、この大地を、海の涯涘に至るまで、海の辺際に至るまで、あまねく巡りて、王城に戻り、[その後]に点心<sup>153</sup>(間食としての軽い食事)の楽しみを味わう。転輪聖王は、かくの如き種類の象宝を具足する。

転輪聖王は、如何なる種類の馬宝を具足するや。さて、灌頂せられたるクシャトリヤの王に、前述の如くにして、馬宝が生ずる。全身が紺青色にして、頭のみ黒く、たてがみはムンジャ草<sup>154</sup>の如く、敬意を払う顔貌あり<sup>155</sup>、黄金の旗を掲げ、黄金の飾りを着け、黄金の網に覆われ、神通を有し、空中を通過して進み、変現[自在]の法を有する、すなわちバーラーハカ<sup>156</sup>と名づける馬王なり。また、クシャトリヤの灌頂王が、馬宝を試みんと欲する時、その時は、日の出の時刻に馬宝に乗り、この大地を、海の周辺に至るまで、海の辺際に至るまで、あまねく巡りて、王城に戻り、[その後]に点心の楽しみを味わう。転輪聖王は、かくの如き種類の馬宝を具足する。

302 転輪聖王は、如何なる種類の珠寶を具足するや。ここに、灌頂せられたるクシャトリヤの王に、前述の如くにして、珠寶が生ずる。清浄なる青色の琉璃にして、八面あり、よく磨かれたり。実にまた、その珠寶の光によって、中宮全体が光輝に充たされる。また、クシャトリヤの灌頂王が、珠寶を試みんと欲する、その時は、夜も更けたる真夜中時に、真暗闇の中にて、その珠寶を旗の頂上に掲げ、美景を見るべく園林に赴く。さすれば実に、その珠寶の輝きのために、四部軍隊の全体は、周囲一由旬(ヨージャナ)<sup>157</sup>に至るまで光明に照らされる。その珠寶の近辺に住する人々、彼らは、

<sup>149</sup> チベット訳には「両舌をするなかれ、悪口するなかれ、綺語を言うなかれ、食欲を有するなかれ、瞋恚を有するなかれ、邪見を生ずるなかれ、殺生を愛好するなかれ、邪見を有する者に親近するなかれ」という内容の文が挿入されているが、梵文はその部分を yāvat (乃至) によって省略している。あるいは、チベット訳において増補されたか?

<sup>150</sup> チベット訳には「北方の海に」に相当する訳語が挿入されている。

<sup>151</sup> チベット訳は「北方の海を越える。越えて」という意味の訳文となっている。

<sup>152</sup> 「七肢」とは「四脚+鼻+両耳」を指すものか?

<sup>153</sup> 「点心」とは「簡単な食事」であり、少量の食事を心(腹)に点ずることから「間食」を意味する。また、広く「茶菓子・茶うけ」の類をいう。

<sup>154</sup> muñja 草は「柔らかで、綿に代用される草の名」である。また、「その繊維で婆羅門の聖紐を造る」という。『佛教語大辞典』1369頁;『梵和大辞典』1049頁参照

<sup>155</sup> チベット訳によれば、「[人が] 乗る時に敬意を表わし」の意である。

<sup>156</sup> bālāhaka (または vālāhaka) は神話的な馬の名である。

<sup>157</sup> yojana (由旬) は距離の単位であり、4 krośa であるとされる。1 krośa (俱盧舍) は「牛の声の届く距離」であり、1 yojana は「約9哩に等しい」とされる。

その光に照らされて、互いに見合い、互いに気づき合い、互いに言い合う、『起きよ、賢兄諸氏、仕事をなすべし。市場を開くべし。太陽は日中に昇るものと、われらは思う』[と]。クシャトリヤの灌頂王は、かくの如き種類の珠寶を具足する。

転輪聖王は、如何なる種類の女宝を具足するや。ここに、灌頂せられたるクシャトリヤの王に、前述の如くにして、女宝が生ずる。正統なるクシャトリヤの娘にして、[背は]高すぎることなく、低すぎることなく、太すぎることなく、細すぎることなく、[肌色は]白すぎることなく、黒すぎることなく、端正にして、愛らしく、優美なり。彼女の全ての毛孔より旃檀<sup>158</sup>の香りを発し、口よりウトウバラ（優鉢羅花）<sup>159</sup>の芳香を放つ。カーチリンディカ衣<sup>160</sup>の如く触れて快く、また、寒き時には彼女の身体に触れるや暖かく感じ、暑き時には涼しく感ずる。彼女は、転輪聖王を除きて、他の者には意中に於てすら愛欲を起さず、況や身体に於てをや。転輪聖王は、かくの如き種類の女宝を具足する。

転輪聖王は、如何なる種類の長者宝を具足するや。ここに、灌頂せられたるクシャトリヤの王に、前述の如くにして、長者宝が生ずる。[長者宝たる者は]教養あり、賢く、聡明にして、天眼<sup>161</sup>を有する。彼は、その天眼によって、周囲一由旬に至るまで、所有者のある財宝を見、[また]所有者なき財宝を見る。彼は、所有者なきものあらば、それらによって、転輪聖王の財務を司る。転輪聖王は、かくの如き種類の長者宝を具足する。

304 転輪聖王は、如何なる種類の將軍宝（臣宝）を具足するや。ここに、灌頂せられたるクシャトリヤの王に、前述の如くにして、將軍宝が生ずる。[將軍宝たる者は]教養あり、賢く、聡明なり。転輪聖王が心中に思念するのみにて、[彼はそれを察して]配置せられるべき軍勢を配置する。転輪聖王は、かくの如き種類の將軍宝を具足する。

以上の如き七種の宝を、転輪聖王は具足する。また、彼には【満】千人の子が生まれ、勇敢かつ勇猛にして、端正なる容姿あり、敵軍をよく摧破する者ばかりなり。彼（転輪聖王）は、この大地を、海の辺際に至るまで、ことごとく、抵抗を受けることなく、武力によらず、武器によらず、征服して<sup>162</sup>、住する。もし、在家より非家へと出家するならば、仏陀になり、欲の享樂を捨離し、他者に依存することなき導師となり、天神や人間たちの教師となるべし」と<sup>163</sup>。

また同じく、他の天子たちも、ジャンブドヴィーパ（閻浮提）に來たりて、獨覺（辟支仏）らに勧告せり。「諸卿<sup>164</sup>、[この]仏国土を離れよ<sup>165</sup>。これより十二年後に、菩薩は母の胎に入るべし」[と]。

さてまた、比丘らよ、その時、ラージャグリハ（王舍城）<sup>166</sup>の大城市の、ゴーラングラパリヴァ

<sup>158</sup>「旃檀」(candana) は香木の一種であり、白・赤・紫などの諸種があり、芳香を發し、薬効があるという。

<sup>159</sup>utpala は蓮華の一種であり、通常「青蓮」「青蓮華」と訳される。

<sup>160</sup>kācilindika (迦旃隣陀) は水鳥の一種で「実可愛鳥」と漢訳される。その羽毛は細軟で、集めて織ると柔軟な衣服（細柔衣）を作ることができるという。【佛教語大辞典】151頁参照。

<sup>161</sup>「天眼」(divya-cakṣu) とは「あらゆるものを見通す超自然的な視力」であり、「五眼」あるいは「六神通」の一つとされる。

<sup>162</sup>チベット訳は「法により征服して」という意味の訳文となっている。

<sup>163</sup>チベット訳は「～と、ヴェーダを誦して教えたり」という意味の訳文となっている。

<sup>164</sup>「諸卿」は、方広には「仁者」と訳されている。

<sup>165</sup>仏陀と成るべき菩薩がもう直ぐ誕生するので、かの菩薩のためにこの国土を仏陀のいない空無なる状態にする必要があるという理由から、天子たちが獨覺仏たちに入滅（般涅槃）を勧める、という場面である。方広には「應捨此土」と訳されている。cf. BHSD.riñcati.

<sup>166</sup>rājagṛha はマガダ国の首都（王城）の名であり、「王舍城」と訳される。

ルタナ<sup>167</sup>という山に、マータンガ<sup>168</sup>と名づける独覚が住したり。彼は、その声を聞くや、あたかも泥<sup>169</sup>の如くに、岩の上に立ち、空中の七ターラの高さにまで上昇し、更に、火界定<sup>170</sup>に入りて、炬火の如くに般涅槃<sup>171</sup>せりとぞ〔言われたり〕。彼の胆汁・粘液・骨・肉・血たりしところのもの、それらの全ては、火によって滅尽に帰し、まさに舍利（遺骨）のみが大地に墮ちたり。かくして、今日でも、それら〔マータンガ独覚〕の足跡は〈仙人の足跡〉（リシパダ）と呼ばれたり。

また、比丘らよ、その時、ヴァーラーナシー（波羅捺国）<sup>172</sup>のリシパタナ（仙人墮處）のムリガダーヴァ（鹿野苑）<sup>173</sup>に、五百名の独覚が住したり。彼らもまた、その声を聞くや、空中の七ターラの高さにまで上昇し、火界定に入りて、炬火の如く般涅槃せり。彼らの胆汁・粘液・骨・肉・筋肉・血たりしところのもの、それらの全ては、火によって滅尽に帰し、まさに舍利（遺骨）のみが大地に墮ちたり。「ここに仙人たちが墮ちたり」と〔言われ〕て、それ以来〈仙人墮處〉の名が生じたり。またそこには、安全を保證されたる（狩猟が禁じられて殺される心配のない）鹿たちが住したり。それを由来として、〈鹿の森〉の「鹿野苑」「鹿野苑」<sup>174</sup>との名が生じたり。

さて比丘らよ、兜率天の端嚴なる宮殿に住したる菩薩は、四種の大観察をなせり。四種とは何か。すなわち、時の観察、洲の観察、国の観察、種姓の観察なり。

306 比丘らよ、何の故に菩薩は〈時の観察〉をなせるや。〔それはすなわち〕菩薩は、世界の太初において、有情<sup>175</sup>の生成する時分には〔まだ〕母の胎に入らず<sup>176</sup>。而して、世界が明瞭にして安定せるものとなり、生が知られ、老が知られ、病が知られ、死が知られる、その時に、菩薩は母の胎に入る〔のが常法なればなり〕。

比丘らよ、何の故に菩薩は〈洲の観察〉をなせるや。〔それはすなわち〕菩薩は辺境の洲には生ずることなし。〔四大洲のうち〕プールヴァヴィデーハ（東勝身洲）には生ぜず、アパラゴダーニーヤ（西牛貨洲）には生ぜず、ウッタラク（北俱盧洲）にも生ぜず。而して、ジャンブドヴィーパ（閻浮提；南瞻部洲）にのみ生ずる〔のが常法なればなり〕。

比丘らよ、何の故に菩薩は〈国の観察〉をなせるや。〔それはすなわち〕菩薩は、辺境の国土にして、その人民が遅鈍かつ暗愚なりて、羊の如き犍喙の類に属し、善説と悪説との義を知る能わざるが如きところには生ずることなし。而して、菩薩は中央の国土にのみ生ずる〔のが常法なればなり〕。

比丘らよ、何の故に菩薩は〈種姓の観察〉をなせるや。〔それはすなわち〕菩薩は下賤なる種姓

<sup>167</sup> golāṅgula-parivartana とは「猿（の一種）が徘徊する」という意味であるが、ここでは山の名として用いられている。

<sup>168</sup> 原語は mātaṅga である。

<sup>169</sup> チベット訳は「泥をつけた鳥」という意味の訳文となっている。方広には「自見其身猶如委土」と訳されている。

<sup>170</sup> 「火界定」(tejo-dhātu) とは「火炎を放つ禪定」の意である。

<sup>171</sup> 「般涅槃」(parinirvāṇa) は「完全な涅槃（さとり）」の意であるが、一般に「仏陀が亡くなること」をいう。涅槃も「仏陀の死」を意味することがあるが、多くは「さとり」を意味し、般涅槃は多くは「仏陀の死」を意味し、時に「さとり」を意味する。

<sup>172</sup> vārāṇasī は現在のベナレス市に当たる都城の名である。

<sup>173</sup> 「仙人墮處」(ṛṣipātana) はベナレス郊外のサールナートの古名で、元來は「仙人が集まる處」の意であり、「鹿野苑」(mṛgadāva) と同じ場所を意味する。釈迦牟尼が最初に説法した初転法輪の地として知られる。ここでは、「仙人が墮ちた處」とする語源解釈の伝説が語られている。

<sup>174</sup> mṛgadāva (鹿野苑) が反復されている。

<sup>175</sup> 「有情」(sattva) とは「生き物」「感情や意識を有するもの」の意であり、古くは「衆生」と訳したが、玄奘以後の新訳では「有情」と漢訳する。『佛敎語大辞典』84頁参照。

<sup>176</sup> 方広には「不於劫初而入母胎。唯於劫滅」と訳されている。

には生まれず、[すなわち] チャンダーラ（旃陀羅）<sup>177</sup>の種姓や、ヴェーヌカーラ（竹匠）の種姓や、ラタカーラ（車匠）の種姓や、プッカサ（獵屠師）の種姓には。而して、二つの種姓にのみ生まれる。[すなわち] バラモンの種姓か、あるいはクシャトリヤの種姓なり。そこにおいて世間がバラモンを尊重するとき、その時はバラモンの種姓に生まれ、世間がクシャトリヤを尊重するとき、その時はクシャトリヤの種姓に生まれる。今は、比丘らよ、世間はクシャトリヤを尊重する。それ故に、菩薩はクシャトリヤの種姓に生まれる。

その義利に依るが故に、兜率天の端嚴なる宮殿に住したる菩薩は四種の大觀察をなせり。[菩薩は] かくの如きを觀察し終わて、黙然として住したり。

かくして比丘らよ、かの天子衆や菩薩たちは、互いに尋ね合えり。「如何なる種族宝の、如何なる種類の母[の胎]に、菩薩は生ずべきや」[と]。そこにおいて、ある者たちは言えり、「このマガダ国のヴィデーハの種族は繁栄し、富み、平和にして、食物豊饒なれば、これは、かの菩薩が在胎するに適したり」[と]。しかし、他の者たちは[反対して]言えり。「これはふさわしからず。それは何ゆえか。すなわち、それは母[の血統]も清浄にあらず、父[の血統]も清浄にあらず。野卑かつ軽薄にして、確固たらず、少分の福德に湿されたるも、広大なる福德に潤されることなく、その種族の<sup>178</sup>国土の周辺は、園林・湖・池は多からず、山村の如く辺境に位置せり。それ故に、それはふさわしからず」[と]。

而して、他の者たちは言えり。「されば、このコーサラの種族は車馬多く、眷属多く、財物に満ちたり。これは、かの菩薩が在胎するに適したり」[と]。しかし、他の者たちは言えり。「それもまたふさわしからず。それは何ゆえか。すなわち、コーサラの種族は[最下級の] マータンガ<sup>179</sup>の種姓より命終し再生したるものにして、母[の血統]も父[の血統]も清浄にあらず、低劣なるものを信樂し、種姓を高めることなく、財宝や宝石の伏蔵を無量に具足することなし。それ故に、それはふさわしからず」[と]。

また、ある者たちは言えり。「このヴァンサ<sup>180</sup>王の種族は繁栄し、富み、平和にして、食物豊饒なり。これは、かの菩薩が在胎するに適したり」[と]。他の者たちはかくの如く言えり。「これもまたふさわしからず。何の故にか。すなわち、ヴァンサ王の種族は凡劣、凶暴にして、威徳の光輝なく、異国の人より生を承け、父母自身の威徳ある業より生じたるにあらず、また、その王は断滅論者<sup>181</sup>なり。それ故、それもまたふさわしからず」[と]。

また、ある者たちは言えり。「この、大都城ヴァイシャーリー<sup>182</sup>は繁栄し、富み、平和にして、食物豊饒なり、かつ、欲樂に満ち、多くの人民を擁し、露台・小塔・塔門・窓架・涼房・重閣・高樓・屋上<sup>183</sup>によって嚴飾せられ、花園や森は連々として花が咲き乱れ、天の都城の如くなり。それ

<sup>177</sup>「旃陀羅」(caṇḍāla) は、インド古来の四姓（四カースト）の外にある賤民とされ、「彼らは蔑視、嫌悪され、人間とはみなされず、犬や豚と同類とみなされた」。『佛教語大辞典』838頁参照。

<sup>178</sup>チベット訳には「種族の」(kula) に相当する訳語がない。

<sup>179</sup>mātaṅga は、上には独覚仏の個人名として出てきたが、ここでは「旃陀羅と同一視される最下級の身分を表わす名称」として用いられている。

<sup>180</sup>原語は vaṃsa (または vaṃśa) であるが、レフマン (S. Lefmann 校訂本) は正誤表で vatsa と訂正している。チベット訳 (bad sa) によれば、vatsa と見るべきか。cf. BHSD.vaṃśa.

<sup>181</sup>「断滅論」(ucchedavāda) とは「死を以て一切の終結と考える学説」であり、輪廻や靈魂不滅を認めない。

<sup>182</sup>vaiśālī (毘舍離) は「インド古代の商業都市」である。『佛教語大辞典』1134頁参照。

<sup>183</sup>チベット訳には「屋上」(tala) に相当する訳語がない。

は、かの菩薩が在胎するに適したり」[と]。[しかし]他の者たちが言えり。「それもまたふさわしからず。何の故にか。すなわち、彼ら（ヴァイシャリーの人々）には、互いに正しく語るということがなく、法を実行することなく、年長・壮年・老年・長老に対して適当なる敬意を表することなく、各々、自ら[次の如く]考えたり、『われは王なり、われは王なり』と。かくして、誰の弟子となることもなく、法性<sup>ほっしょう</sup><sup>184</sup>に近づくこともなし。それ故、それもまたふさわしからず」[と]。

而して、ある者たちはかくの如く言えり。「このプラドゥヨータ<sup>185</sup>の種族は大勢力あり、戦車多く、敵との戦線において勝利を得たり。それは、かの菩薩が在胎するに適したり」[と]。しかし、他の者たちはかくの如く言えり。「それもまたふさわしからず。何の故にか。すなわち、彼らは残酷、軽薄、凶暴、粗野、無謀にして<sup>186</sup>、業<sup>ごう</sup><sup>187</sup>の存在<sup>187</sup>を認めず。それ故、それもまた、かの菩薩が在胎するにふさわしからず」[と]。

310 ある者たちは、かくの如く言えり。「このマトゥラー<sup>188</sup>の城市は繁栄し、富み、平和であり、食物豊饒にして、多くの人民に満ちたり。シューラセーナ[国]<sup>189</sup>の支配者たるスパーフ<sup>190</sup>王の都城なり。それは、かの菩薩が在胎するに適したり」[と]。しかし、他の者たちは言えり。「それもまたふさわしからず。何の故にか。すなわち、その王は邪教の家系に生まれたる、ダスユ（非アリアン族）の王<sup>191</sup>なり。最後身の菩薩<sup>192</sup>が邪教の種族に生まれるは適切ならず。それ故、それもまたふさわしからず」[と]。

更にも、他の者たちは言えり。「このハスティナーブラ【大】都城の王はパーンダヴァの家系<sup>193</sup>より生まれ、勇敢にして、最勝なる肢体の色相を具有し、敵軍をよく摧破する。その種族は、かの菩薩が在胎するに適したり」[と]。しかし、他の者たちは言えり。「それもまたふさわしからず。何の故にか。すなわち、パーンダヴァの種族に生まれたる者たちは家系の乱れたること甚だしく、ユディシュティラはダルマの子なりと言われ、ピーマセーナはヴァーユの、アルジュナはインドラ

<sup>184</sup>「法性」(dharmatva)とは「事物の本質」「万物を貫いている究極の真理」の意であり、「真如」ともいう。チベット訳には、単に「法」(chos)と訳されている。

<sup>185</sup>pradyotaは、方広に「勝光王」と訳されており、『國譯一切経』(本縁部九)の当該部分(14~16頁)に「これは阿槃提國(Avanti)の王なり。阿槃提國は、西印度要衝の地にあり、首府を優禪尼城(Ujjaini)という。釈尊時代、一強国をなせり」と注記されている。

<sup>186</sup>チベット訳は「残酷、凶暴、粗野、無謀、野卑にして」という意味の訳文となっている。

<sup>187</sup>「業」(karman)とは「行為がもたらす影響力」であり、「善行をすれば善業(功德；福德)が蓄積されて幸運の原因となり、悪行をすれば悪業(罪業)が蓄積されて不運の原因となる」というような考え方を「業報説(業の存在を認める思想)」という。

<sup>188</sup>mathurāはヤムナー河畔にあり、古くから神聖視された都市の名である。現在のmuttraに当たる。

<sup>189</sup>原語はśurasenaである。

<sup>190</sup>原語はsubāhuである。

<sup>191</sup>dasyuは「非バラモン族の男」を指し、「不信者」「盗賊」「諸神の敵」などの意味で用いられる。元来はアーリヤ人に征服された先住民に対する蔑称であった。チベット訳は「野蛮人の如き王」という意味の訳文となっている。

<sup>192</sup>「最後身の菩薩」(caramabhavika-bodhisattva)とは「成仏するためにこの世に生まれてきた菩薩」であり、これを以て最後の生となるので「最後身」と呼ぶ。「一生補処」(ekajāti-pratibaddha)の菩薩は、最後身として生まれる一つ前の生にるので、「最後身」と「一生補処」とは厳密に区別すべきであるが、caramabhavikaが「一生補処」と漢訳されている場合があり、混同しやすい。【上巻】の拙訳にも、この種の誤訳が数箇所含まれているが、この【改訂版】で全て訂正する。

<sup>193</sup>hastināpuraは「象城」とも訳される古代の都城であり、その遺跡はデリーの北東75マイルの地点にある(『梵和大辞典』1553頁参照)。また、pāṇḍavaは「pāṇḍuの息子たる五王子の家系」を意味するが、叙事詩「マハーバーラタ」ではクル族に勝利する王族の名として描かれる。

の、ナクラとサハデーヴァはアシュヴィン双神の子なり<sup>194</sup>と言われたり。それ故、その種族もまた、かの菩薩が在胎するにふさわしからず」[と]。

ある者たちは言えり。「このミティラーの城市は極めて楽しく、ミティラー王スミトラ<sup>195</sup>の居住地にして、その王たるや、多くの象と馬と戦車と歩兵より成る軍勢（四種兵衆）を有し、多くの金貨・黄金<sup>196</sup>・宝珠<sup>ほうじゆ</sup>・真珠<sup>しんじゆ</sup>・琉璃<sup>るり</sup>・螺貝<sup>らがい</sup>・碧玉<sup>へきぎよく</sup>・珊瑚<sup>さんご</sup>、金や銀<sup>197</sup>の財物や資具を有し、あらゆる近隣の王を恐れざる力と剛勇とを有し、朋友を持ち、法を愛好する。その種族は、かの菩薩が在胎するに適したり」[と]。[しかし]他の者たちが言えり。「それもまたふさわしからず。何の故にか。かのスミトラ王は、かくの如き徳を有する者なりとはいへ、甚だ高齢なるが故に、子をもうけること<sup>あた</sup>能わず、また、[すでに]あまりにも多くの子を有したり。それ故に、その種族もまた、かの菩薩が在胎するにふさわしからず」[と]。

かくの如く、彼ら、菩薩たちと天子たちは、ジャンブドゥヴィーパ（閻浮提）全土における十六大国<sup>198</sup>中の、あらゆる高名なる王族の、それら全てを観察したれども、[それら]全てを欠点あるものと見なしたり。彼らが熟慮思念せる時、ジュニャーナケートウドゥヴァジャ<sup>199</sup>（智光幢）と名づける天子にして、菩提<sup>ぼだい</sup>より不退転<sup>ふたいてん</sup>なる、この大乘に目的を定めたところの者あり、彼は、彼ら  
312 諸菩薩と天神の大衆に対して、かくの如く言えり。「いざ、諸君、かの菩薩自身のもとに赴いて、問訊<sup>もんしん</sup>すべし。如何なる徳を具有する種族<sup>200</sup>に、最後身の菩薩は再生すべきなりや」と。「善きかな」と、彼らはみな菩薩のもとに到り、合掌して尋ねたり。「賢善<sup>けんぜん</sup>なる者よ、如何なる徳を具有する種族<sup>201</sup>宝<sup>ぞくほう</sup>に、最後身の菩薩は再生すべきなりや」と。

その時、菩薩は、彼ら菩薩の大衆と天神衆とを眺めて、かくの如く述べたり。「諸君、最後身の菩薩が生まれるところの、その種族は、六十四相を具備すべし。如何なる六十四【相】をか。すなわち、その種族は有名なり、その種族は誉れ高く、その種族は弱小ならずして[しかも、他種族を]侵害することもなく、その種族の家系は由緒<sup>ゆいしよ</sup>正しく、その種族は族姓<sup>ぞくしやうしんせい</sup>真正にして、その種族は人間の系統を[嫡嫡<sup>ちやくちやく</sup>]相承し<sup>201</sup>、その種族は怯弱ならず、その種族は祖先の系譜を[縷縷<sup>るる</sup>]相承し、その種族は高貴なる人間の系統を相承し、その種族は誉れ高き人間の系統を相承し、その種族は偉大なる人間の系統を相承し、その種族は多くの女人を有し、その種族は多くの男子を有し<sup>202</sup>、その種族は臆病ならず、その種族は下劣ならず怯弱ならず、その種族は貪欲ならず、その種族は戒を有し、その種族は智慧を有し、その種族は王臣たちの庇護のもとに富を享受し、その種族は有益なる技芸に従事して富を享受し、その種族は友情に厚く、その種族は畜生に生まれたる衆生を害するこ

<sup>194</sup> yudhiṣṭhira, bhīmasena, arjuna, nakura, sahadēva は「paṇḍu の息子たる五王子」の名である。dharma, vāyu, indra, aśvin は神々の名である。

<sup>195</sup> mithilā はヴィデーハ国の首都の名であり、王の名 sumitra は「善友」と漢訳される。

<sup>196</sup> 「金貨・黄金」は、チベット訳には「黄金・銀」と訳されている。

<sup>197</sup> チベット訳には「銀」に相当する訳語がない。

<sup>198</sup> 「釈尊在世の頃にインドに存立した十六の大国」、すなわち aṅga, magadha, kāśi, kośala (kosala), vṛjī(vajji), malla, ceḍi(ceti), vatsa(vamśa), kuru, pañcāla, aśvaka(assaka), avanti, matsya(maccha), śūrasena(śūrasena), gandhāra, kamboja である。【佛光大辞典】2417頁参照。

<sup>199</sup> 原語 jñānaketudhvaja は【智の光明の旗】の意であり、方広には「智幢」と訳されている。

<sup>200</sup> 「種族」は、チベット訳では「種族宝」と訳されている。

<sup>201</sup> 【仏本行集経】（大正蔵経第三巻）679上）には「體胤嫡嫡相承」と訳されている。「輪廻転生において人間以外の生き物に再生したことがない」ということを意味すると思われる。

<sup>202</sup> チベット訳では「その種族は多くの男子を有し、その種族は多くの女人を有し」と、前後入れ替わっている。

となく、その種族は恩を知り〔恩を感じ、約束を守り〕<sup>203</sup>、その種族は貪欲<sup>とんよく</sup>もて行為することなく、その種族は瞋恚<sup>しんに</sup><sup>204</sup>もて行為することなく、その種族は愚癡<sup>ぐち</sup><sup>205</sup>もて行為することなく、その種族は怖畏<sup>ふい</sup>もて行為することなく、その種族は不名誉を恐れ、その種族は愚癡に住することなく、その種族は氣前よく施物をほどこし、その種族は仕事に熱心であり、その種族は捨施に熱心であり、その種族は布施に熱心であり、その種族は男らしい行動を理解し、その種族は剛勇堅固にして、その種族は力強き剛勇を有し、その種族は卓越せる剛勇を有し、その種族は聖仙<sup>せいせん</sup><sup>206</sup>を供養し、その種族は天神を供養し、その種族は塔廟(チャイトヤ)<sup>207</sup>を供養し、その種族は祖霊を供養し、その種族は遺恨を残すことなく、その種族は十方に名声が響きわたり、その種族は多くの眷属を有し、その種族は分裂することなき眷属を有し、その種族は最勝なる眷属を有し、その種族は種族中の上首にして、その種族は種族中の最上であり<sup>208</sup>、その種族は諸種族中の支配権を有し、その種族は偉大なりと称せられ、その種族は母を尊重し、その種族は父を尊重し<sup>209</sup>、その種族は沙門<sup>しやもん</sup><sup>210</sup>を敬い、その種族は婆羅門<sup>バラモン</sup>を敬い、その種族は財物や穀物の倉庫を多く有し、その種族は多くの金貨・黄金・宝珠・真珠<sup>211</sup>・金や銀の財物や資具を有し、その種族は多くの象・馬・駱駝・牛・羊を有し、その種族は多くの下女・下男<sup>212</sup>・使用人・労役人夫<sup>ろうえきにんぶ</sup>を有し、その種族は攻撃しがたく、その種族はあらゆる目的を成就し、その種族は転輪聖王の家系より生じ、その種族は宿世<sup>すくせ</sup><sup>213</sup>の善根を伴侶として積集<sup>しやくじゅう</sup><sup>214</sup>し、その種族は菩薩の〔家系の中でも〕高貴なる家系より生じ、その種族は天界・魔界・梵天界を含む世間において、〔また〕沙門・婆羅門を含む衆生の中において、家系についての如何なる悪言によっても非難されることなし。諸君、最後身の菩薩が生まれるべきところの、その種族は、かくの如き六十四の相を具足せり。

諸君、最後身の菩薩が入胎するところの女人、その女人は、三十二の徳相を有する。如何なる三十二相をか。すなわち、最後身の菩薩は、著名なる女人の胎に入る。〔また〕誉れ高く、作法に欠けたところなく、血統の由緒正しく、族姓は真正であり、容色端正にして、名号は称えられ、身形は縦横に申し分なく、未だかつて出産せず、戒を堅持し、捨施をよく実行し、顔に微笑を浮かべ、万事に適切に対応し、聡明にして、柔和であり、畏れるところなく、博識にして、教養あり、狡猾にあらず、誑惑<sup>きやうわく</sup>せず、忿怒を捨て、嫉妬を離れ、慳貪<sup>けんどん</sup>にあらず、輕薄にあらず、移り氣にあらず、

<sup>203</sup>〔 〕内の原文 (kṛtavedhitam ca pratijñam ca) は主要東大写本に挿入されているが、チベット訳にはこれに相当する部分はない。

<sup>204</sup>「瞋恚」(doṣa) とは「自分の心に逆らうものを怒り恨むこと」である。

<sup>205</sup>「愚癡」(moha) とは「理非の区別のつかない愚かさ」である。広辞苑(第6版)参照。

<sup>206</sup>「聖仙」(ṛṣi) とは「聖なる仙人」の意である。

<sup>207</sup>「塔廟」(caitya) は「制多」や「支提」と音訳され、「靈廟」「靈祠」を意味した。「神聖視される樹木、祠、石塔、塚、堂など、そこに何か霊が宿っていると考えられたもの」を意味したが、仏教にとり入れられ、「仏を供養し、崇拜する場所」「仏堂」を指すようになった。『佛教語大辞典』823頁(「制多」の項目)参照。

<sup>208</sup>チベット訳には、この部分の訳が欠如しており、そのために六十三相となり、一相の不足となっている。チベット訳のミスと思われる。

<sup>209</sup>チベット訳では「その種族は父を尊重し、その種族は母を尊重し」と、前後入れ替わっている。

<sup>210</sup>「沙門」(śramaṇa) とは「出家者の総称」であり、「剃髪し、諸種の悪をとどめ、身心を制御して善につとめ、さとりに進むために努力する人」をいう。『佛教語大辞典』601頁参照。

<sup>211</sup>チベット訳によれば、更に「琉璃・貝殻・碧玉・珊瑚」が挿入されるべきであるが、写本の支持がない。

<sup>212</sup>チベット訳では「下男・下女」と入れ替わっている。

<sup>213</sup>「宿世」とは「輪廻中における過去の世」であり、「この世に転生してくるまでに経てきた前世の全体」をいう。「しゅくせ」とも読む。

<sup>214</sup>「積集」とは「善根を積み集めること」をいう。



316 饒舌に<sup>じょうぜつ</sup>あらず、忍耐強く且つ柔和にして、慚愧の心あり、貪欲・瞋恚・愚癡は微弱にして、女人の過惡を離れ、夫に忠実にして、あらゆる徳相を具足せる女人の胎に、最後身の菩薩は入る。諸君、最後身の菩薩が入胎するところの女人、その女人は、かくの如き三十二相の徳相を具足する。

実にまた、諸君、菩薩は、黒分の半月<sup>こくぶんはんがつ</sup>においては、母の胎に入らず、而して、必ずや白分の半月<sup>びやくぶん</sup>において、第15日の満月の夜に、満月にプシュヤ星が合する時<sup>215</sup>、布薩（斎戒）に従事せる母の胎に、最後身の菩薩は入る」[と]。

さてその時、かの諸菩薩と、かの天子衆とは、菩薩より、かくの如く「種族の清浄性と母の清浄性とはかくの如くなるべし」と聞くや、作意思念<sup>216</sup>せり。「この賢善なる人によってその特質の示されたる、かくの如き徳を具足せるのは、いずれの種族ならんや」[と]。彼らが作意思念に専心せる時、かくの如き考えが生じたり。「実に、このシャーキヤ<sup>217</sup>（釈迦）の種族<sup>218</sup>は繁栄し、富み、平和であり、食物豊饒にして、楽しく、多くの人民に満ちたり。シュドーダナ<sup>219</sup>王（浄飯王）は母[の血統]が清浄であり、父[の血統]が清浄であり、妃も清浄にして、境遇に悩まされることなく<sup>220</sup>、相貌すぐれ、甚だ聡明なりて[教化し易く]、福德の威光に輝き、マハーサンマタ<sup>221</sup> [王]の家系に生まれ、転輪聖王の種族の血統より生じ、無尽なる財宝・宝蔵・宝玉を有し、業[の存在]を認め、邪見を離れ、シャーキヤ族の全国土における唯一の王にして<sup>222</sup>、長者・居士<sup>223</sup>・大臣・眷属<sup>224</sup>に恭敬せられ尊重せられ、優美にして、見目好く、老年すぎることなく、若年すぎることなく、容貌端正にして、あらゆる徳を具足し、技芸を知り、時を知り、自己を知り、法を知り、真実を知り<sup>225</sup>、世間を知り、瑞相を知る。法の王にして、法をもって統治する。また、カピラヴァスツ<sup>226</sup>の大都城は善根を植えたる人々の住處なり。しかも、そこに現存するところの人々は、まさにそのような[善根の]自性を有したり。また、マヤー<sup>227</sup>と名づける、シュドーダナの妃は、シャーキヤ族の王たるスプラブダ<sup>228</sup>の娘にして、若くて、初々しく、青春の美を具有し、未だかつて出産せず、息子も娘も持たず、容姿端麗にして、画に描かれたるが如く美しく、天女の如くにして、あらゆる装身具もて飾られ、女人の欠点を捨離し、真実を語り、荒々しからず、粗暴ならず、動揺す

<sup>215</sup> puṣya は「二十八宿」のうち、「第六の月宿」であり、「鬼宿」と訳される。

<sup>216</sup> 「作意思念」(cintā-manas-kāra) とは「対象に注意を向け、集中して考えること」である。

<sup>217</sup> śākya (釈迦) 族は、カピラ城を都城とする王族であり、その祖先は太陽より出たとされる。「釈種」「釈迦種」などと漢訳される。

<sup>218</sup> チベット訳では「種族」ではなく「都城」と訳されている。

<sup>219</sup> śuddhodana (śuddha+udana) は「白米の飯」の意。釈尊の父の名である。

<sup>220</sup> チベット訳は「行為の結果に悩むことなく」という意味の訳文となっている。

<sup>221</sup> mahāsāmata とは「民衆によって選挙され、承認されて帝王となった」という意味であり、衆議（人民の選挙）によって推挙されて国王となった人をいう。「最初の国王は人民の選挙によって選ばれたが、その後、彼の子孫が国王として続いている」という仏教徒の伝統的見解によるものである。「衆許摩訶帝」と漢訳され、「衆許摩訶帝経」という名の仏伝経典が現存する。『佛教語大辞典』630頁参照。

<sup>222</sup> チベット訳は「全国土においてかの王は唯一であり」という意味の訳文となっている。

<sup>223</sup> 「居士」(gṛhapati) は「家の主」の意味であり、「家業に従事し、財産の豊かな男子」「商工業に従事する富豪」であり、四カーストの第三階級であるヴァイシャに相当する。仏教が盛んであった時代の諸都市においては、資産者である居士が一つの有力な階級と考えられていた。『佛教語大辞典』346頁参照。

<sup>224</sup> チベット訳には「あらゆる眷属」と訳されている。

<sup>225</sup> チベット訳によれば「衆生を知り」であるべきだが、写本の支持がない。

<sup>226</sup> kapilavastu (迦維羅衛) は釈迦族の王城である。kapila は古聖仙の名であるが、「黄色」「黄赤色」の意味があり、そこに黄頭仙人(カピラ)という黄髮の行者が住んでいたと伝えられる。

<sup>227</sup> māyā は「幻」「幻影」の意。釈尊の生母の名である。

<sup>228</sup> 原語は suprabuddha であり、方広には「善覺王」と訳されている。

318 ることなく、過失なく、コーキラ鳥<sup>229</sup>の如き声を有し、饒舌に<sup>じょうぜつ</sup>あらず、優美にして、甘美に愛らし  
く語り、頑迷・忿怒・倨傲・驕逸・憎悪を断除し、嫉妬心なく、時に応じて語り、捨施をよく実行  
し、戒を堅持し、夫に満足し、夫に貞節にして<sup>230</sup>、他の男に懸想することなく、頭と耳と鼻とはよ  
く均斉がとれ、美しき蜜蜂 [の色] に似たる髪を有し、額は美しく、眉は美しく、眉をしかめるこ  
となく、顔に微笑を浮かべ、先んじて挨拶をなし、温和にして<sup>231</sup> 美妙なる言葉を発し、万事に適切に  
対応し、正直にして、邪曲にあらず、狡猾にあらず、誑惑することなく、慚愧を具足し、移り気  
にあらず、軽薄にあらず、悪言することなく<sup>231</sup>、みだらな言葉を発せず、食欲・瞋恚・愚癡は微弱に  
して、忍耐強く且つ柔和なることこの上もなく、手・足・眼、及び心意はよく統御せられ、手足は  
柔らかくしなやかにして<sup>232</sup>、カーチリンディカ衣の如く触れて快く、新鮮なる蓮華の葉の如く清浄  
なる眼を有し、愛らしき色の高さ鼻を有し<sup>233</sup>、体型は美しく整い、虹の如くほっそりとして行儀正  
しく<sup>234</sup>、四肢と各肢節の均斉うるわしく、四肢に瑕疵なく、唇はピンバ果<sup>235</sup>の如く、見目麗しく、  
先細の首を有し、美しき装飾品を着け、齒はスマナーやヴァールシキー<sup>236</sup>の [花の] 如く白浄にし  
て、しとやかなる肩を有し<sup>237</sup>、先細の美しき腕を有し、腰は弓 [の柄] の如く [細く]、脇部に汚点  
なく、臍の穴は深く、丸く幅広く柔軟にして丈夫なる<sup>238</sup> 臀部を有し、金剛の堅固さにも匹敵する [ほ  
ど強健なる] 四肢を有し<sup>238</sup>、象の鼻の如く平齊なる<sup>239</sup> 腿を有し、脛は羚羊や鹿の [脛の] 如く、掌と  
足の裏とはラクシャー液<sup>239</sup> (赤き染料) の如くにして、[彼女を観る] 衆生の眼に喜びを与え、眼  
根 (視覚器官) に障礙あることなく、魅惑的にして愛らしき容貌を有し、女宝の容色よりもすぐれ、  
[彼女を] 凌駕する者なく、幻 (マーヤー) より生じたる像の如く [なるが故に] マーヤーなる名  
の俗称を得ており、技芸に秀で、ナンダナ園<sup>240</sup> (歓喜園) のアプサラス (天女) の如き光輝ありて、  
シュドーダナ大王<sup>241</sup>の中宮の中に住する。彼女は、この菩薩の母となるにふさわしき者なり。また、  
菩薩によって説かれたる、かの種族の清浄性、それはシャーキヤ族にのみ認められ、他には認めら  
れず] [と]。

そこで、かくの如く言われる。

1. 清浄なる衆生 (菩薩) は、ダルモーチャヤ (法集) 堂閣<sup>242</sup>において、  
スダルマ (妙法) なる獅子座に安坐せり。

<sup>229</sup> kokila (鳩夷羅) は「インドの郭公」であり、美声で名高く、「好声鳥」「美音鳥」と漢訳される。

<sup>230</sup> チベット訳は「夫婦の誓戒を守り」という意味の訳文となっている。

<sup>231</sup> 「上巻」の拙訳では、amukharā を「饒舌ならず」と訳したが、直前において apralāpini を「饒舌ならず」と訳しており、同じ訳語が重複することになるので、ここでは「悪言することなく」という訳語に訂正する。

<sup>232</sup> チベット訳には「手足は非常に柔らかく」と訳されている。

<sup>233</sup> チベット訳は「鼻の形は好く [また] 色は愛らしく」という意味の訳文となっている。

<sup>234</sup> チベット訳は「虹の如くたおやかにお辞儀し」という意味の訳文となっている。

<sup>235</sup> bimba (頻婆果) は「頻婆樹の果実であって、赤色なので女子の唇の色にたとえられる」。『佛教語大辞典』1150頁参照。

<sup>236</sup> sumanā (須摩那) も vārṣiki (婆利師迦) もジャスミン系の花であり、香りが強い。

<sup>237</sup> この箇所原文の意味ははっきりしないが、チベット訳には「肩は美しく均斉がとれており」という意味の訳文が当てられている。

<sup>238</sup> チベット訳は「金剛の如く堅固にして無比なる四肢を有し」という意味の訳文となっている。

<sup>239</sup> lākṣā (羅差) は赤い染料の一種で、胭脂色である。「紫色」とも漢訳される。『佛教語大辞典』1402頁参照。

<sup>240</sup> nandana (歓喜園) は、切利天 (三十三天) にある帝釈天の四園の一つである。

<sup>241</sup> チベット訳には「大」に相当する訳語がない。

<sup>242</sup> prāsāda は「楼閣、殿堂、講堂」等と漢訳されるので、ここでは「講堂としての楼閣」という意味で「堂閣」と訳した。

- 名声高き諸菩薩と、[それと] 同類の諸天神により、  
聖仙（菩薩）は圍繞せられたり。
- 320 2. そこに安坐せる者たちに、[次のような] 思いが生じたり。  
「いずれの種族が、清浄にして思慮深く、  
菩薩が生まれるにふさわしかるべきや。  
また、本性清浄なる母と父とはいずこにありや」[と]。
3. [彼らは] ジャンプなる洲（閻浮提）を、くまなく観察して、  
勢力あるクシャトリヤの王族の、  
全てを、欠点あるものと思量して、  
シャーキヤ族（釈迦族）のみを欠点なきものと見なしたり。
4. 「シュドーダナ王（浄飯王）は王族中の貴族にして、  
人王（人間の王）の家系において、族姓清浄なり。  
[その種族は] 繁栄し、富み、争乱なく、  
敬虔にして、正善なる人法に遵う。
5. また、カピラと呼ばれる都城（カピラヴァスツ）の、他の人々も、  
みな、清浄なる意向と法とを有し、  
園林・庭園・精舎<sup>243</sup>に飾られたる、  
誕生の地は、カピラなる都城にありて輝けり。
6. [かの都城の男は] みな、大力士の力を有し、  
二、三頭もの象[に匹敵するほど]の力あり。  
また、弓の技術において最高に達すれども、  
生活のためにとて、他[の生類]を傷害することなし。
7. シュドーダナ王の第一の妃にして、  
千の姪女の上首となりたる、  
魅惑的なること、幻（マーヤー）より生じたる像の如き、  
彼女は、マーヤー妃の名をもて呼ばれる。
8. 容貌の美しきこと、天女の如くにして、  
均齊のとれたる身体を有し、四肢は清浄無垢なり。  
マーヤー妃を観て厭足するところの、  
天神もなければ、また、人間もなし。
- 322 9. 食欲に染まらず、また、罪業に汚されず、  
彼女は、柔軟・温和にして、正直なる優しき言葉を語る。  
荒々しからず、粗暴ならず、おだやかにして、  
彼女は、微笑を浮かべ、眉をしかめることなし。

<sup>243</sup>「精舎」(vihāra) とは「修行者の住居」「僧院」であるが、チベット訳はこれに「宮殿」(vimāna) に当たる訳語を充てている。

10. 慚<sup>ざん</sup>あり、愧<sup>き</sup>あり<sup>244</sup>、法（義務的行事）を遂行し<sup>245</sup>、  
慢心なく、尊大ならず、軽薄ならず、  
嫉妬心なく、また、欺瞞することも、幻惑することもなく、  
捨施を愛好し、常に慈心<sup>じしん</sup>を有する。
11. 業<sup>ごう</sup>〔の存在〕を認め、邪悪なる手段を離れ、  
真実<sup>しんじつ</sup>に止住し<sup>246</sup>、身心はよく統御せられたり。  
地上に存在する、多くの、女人の欠点<sup>けい</sup>の群、  
それらのすべては、彼女には全く存在せず。
12. 人間界、ガンダルヴァ<sup>247</sup>界、また、天界にも、  
マーヤー妃に等しき女人は存在せず。  
況<sup>ま</sup>して、すぐれたる者やあらん。  
彼女こそ、大仙<sup>だいせん</sup><sup>248</sup>（菩薩）の母たるにふさわしけれ。
13. まるまる五百もの前生において<sup>249</sup>、  
彼女は、菩薩の母となれり。  
また、各処（各々の前生）において、父はシュドーダナなりき。  
それ故に、〔彼女は菩薩の〕母たるにふさわしき徳を有する<sup>250</sup>。
14. 彼女は誓戒<sup>せいかい</sup><sup>251</sup>に従事し、苦行女<sup>くぎょうにょ</sup>の如くに住し、  
誓戒<sup>じっけんこう</sup>を遵行し、常に、正法<sup>しやうぽう</sup>を行ずる。  
〔彼女が〕王に許されて、かなえられたる願望あり、〔すなわち〕  
「三十二ヶ月の間、〔私と〕愛欲<sup>あいよく</sup>を交わしたもうことなかれ<sup>252</sup>」〔との〕。
15. 彼女が立ち、坐すところの、また、  
横たわり、歩行するところの場所、  
その辺<sup>あた</sup>りは、浄業<sup>じやうごう</sup>に従事せる、  
彼女の光輝の故に、照らされたり。
- 324 16. 天神・阿修羅、あるいは、人間にして、  
愛欲の心もて〔彼女を〕眺めうる者はあらず。  
威儀道<sup>いぎどう</sup><sup>253</sup>（行儀）において高貴なる徳を有する彼女を、

<sup>244</sup>「慚」(hri)は「内心に恥じること」であり、「愧」(vyapatrāpin)は「他者に対して恥じること」である。

<sup>245</sup>【上巻】の拙訳では、dharmacārinを「梵行を具足し」と訳したが、誤訳と思われるので、「法（義務的行事）を遂行し」と訂正する。

<sup>246</sup>「真実に止住し」とは「真実を守り、そこから離れることなく」という意味である。

<sup>247</sup>gandharva（乾闥婆）とは「神話上の妖精の名」であり、「天界に住み、神々の飲料であるソーマ酒を守護するもの」と考えられた。仏教に採り入れられて、「天龍八部衆」の一つとされ、「帝釈天に仕えて音楽を奏する」とされる。『佛教語大辞典』325頁参照。

<sup>248</sup>「大仙」(maharṣi)とは「偉大な仙人」の意であるが、仏教では仏陀の異称とされ、あるいは独覚（縁覚）を指す場合もある。ここでは、成仏すべき菩薩の呼称として用いられている。

<sup>249</sup>チベット訳では「五百の前生の、まさに全てにおいて」という意味の訳文となっている。

<sup>250</sup>チベット訳は「功德を有する者の母たるにふさわしい」という意味の訳文となっている。

<sup>251</sup>「誓戒」(vrata)とは「自分自身の上に課した禁欲的な遵守事項」であり、「自分で誓いを立てて実行する聖なる行い」を意味する。

<sup>252</sup>チベット訳では「愛欲を行じざること、三十二ヶ月なり」という意味の訳文となっている。

<sup>253</sup>「威儀道」(iryāpatha)とは「礼式にかなった態度」「規律に即した起居動作」の意であり、単に「威儀」と訳されること

- みな、母や娘〔に等しきもの〕と観る。
17. マーヤー妃の清浄なる行為の故に、  
王族（釈迦族）はますます繁栄し強大となり、  
地方の諸王を侵害することなくして、  
〔シュドーダナ〕王の名誉と名声は増長（増大）せり。
18. かくの如く、マーヤーは〔菩薩を孕む〕容器たるにふさわしく、  
同じく、尊き衆生（菩薩）は最高に輝けり。  
これら兩名は、この上なき徳を有するがゆえに、  
彼こそ息子に、かのマーヤーは母たるにふさわしきと見るべし<sup>254</sup>。
19. 人中の最上者（菩薩）を〔胎内に〕保持しうる、  
かかる女人は、ジャンプ洲（閻浮提）には、他に存在せず。  
勝れたる徳を具足し、実に、一万頭の象の力を有する、  
〔マーヤー〕妃を除きては。〕
20. かくの如く、かの、高貴なる諸天子と、  
智慧廣大なる諸菩薩とは、  
マーヤー妃を称讃せり、「徳ある彼女は、  
シャーキヤ族に喜びを与える者（菩薩）の母たるにふさわしき」と<sup>255</sup>。

〔以上〕「清浄種族品」と名づける第3章なり。

---

が多い。なお、「行・住・坐・臥の立ち居ふるまいが正しいこと」を「四威儀」という。

<sup>254</sup>この偈の下2行は、諸写本の原文に混乱が見られる。チベット訳によれば、「この兩名は、最高の徳を有するがゆえに、この者（菩薩）こそ〔彼女の〕息子となり、彼女こそ〔彼の〕母となるにふさわしい」という意味である。

<sup>255</sup>この偈の下2行は、チベット訳では「シャーキヤ族に喜びを与える者の母に、有徳なるマーヤーがなる、と言った」という意味の訳文となっている。